398
64

エト5A-4

398-64

近江蒲生郡志

卷七

大正
11. 6. 10
内交

近江蒲生郡志卷七

寺院志目次

總論 一一

第一章 寺院佛堂表 一一

第一節 天台宗 一一

一 山門派 一五

二 眞盛派 一七

第二節 眞言宗 一七

第三節 淨土宗 二四

第四節 淨土眞宗 二四

一 本派 二四

二 大谷派 二九

三　木部派　三四
四　佛光寺派　三五
五　興正寺派　三七
第五節　禪宗　三七
一　臨濟宗　三七
二　曹洞宗　三九
三　黃蘗宗　四〇
第六節　日蓮宗　四一
第七節　佛堂　四二
第八節　廢寺　四七
第二章　寺院由緒　五〇
第一節　八幡町　五〇
洞覺院　五〇　本願寺別院　五二　正福寺　五八
順應寺　六〇　正榮寺　六一　妙法寺　六二
蓮照寺　六二　善住寺　六四　寶積寺　六四
蓮經寺　六六　西方寺　六六　願故寺　六八
第二節　岡山村　六八
西蓮寺　六八　願成就寺　六九　嚴淨寺　八五
西願寺　八五　長誓寺　八六　祐嚴庵　八六
眞念寺　八六　順念寺　八七　淨國寺　八八
乘蓮寺　八八　願誓寺　八九　願福寺　八九
生蓮寺　九三　信行寺　九三　淨寶寺　九三
圓宗寺　九四　稱念寺　九四　善性寺　九五
稱名寺　九六　定林寺稱藥師堂　九六
第三節　桐原村　九八
興願寺　九八　覺永寺　一〇二　德行寺　一〇五
地福寺　一〇五　莊嚴寺　一〇六　光照寺　一〇八
第四節　宇津呂村　一〇八
正宗寺　一〇八　大光寺　一一六　寬太寺　一一六
眞成寺　一一七　西光寺　一一七　旅庵寺　一二七

正福寺 一三〇　東漸寺 一三一　興隆寺 一三三
壽德寺 一三五　東照寺 一三六　圓滿寺 一三六
西照寺 一三七　舊緣寺 一三七

第五節　島村　一三八

長命寺 一三八
一　寺の再興と延暦寺西塔院の別院 一三八
二　皇室の祈願 一三九
三　佐々木氏の崇敬 一三九
四　蔕次の規定 一四一
五　佛供燈油田等の寄進 一四一
六　西國三十三所觀音の巡拜靈場 一四二
七　一山の兵燹と再建 一四三
八　織田豊臣德川時代の寺領 一四五
穀屋寺 二三七　伊崎寺 二三八　西福寺 二五二
願證寺 二五二　國清寺 二五二　延命寺 二五三

寶珠寺 二五三

第六節　金田村　二五三

明光寺 二五三　元稱寺 二五四　正圓寺 二五五
西常寺 二五五　光明寺 二五六　東光寺 二五七
正壽院 二五八　德應寺 二五八　敎稱寺 二五九
圓光寺 二五九　淨道寺 二五九

第七節　安土村　二六〇

桑實寺 二六〇
一　藥師寺の別當職 二六〇
二　將軍足利義晴の假寓と寺緣起の寄附 二六三
三　義晴結婚式を當寺に擧ぐ 二六五
四　織田信長と當寺 二六七
五　江戸時代の當寺 二六七
淨嚴院 二七九　法福寺 三二一　西性寺 三二二
善德寺 三二三　永照寺 三二三　東南寺 三二五

西光寺 三三〇　會勝寺 三三一　摠見寺 三三一
觀音堂 三五七　西法寺 三五七

第八節　老蘇村　三五八

觀音正寺　三五八
一　後宇多法皇の御祈願と勅使登山　三六〇
二　異國降伏の御祈り　三六三
三　後醍醐天皇の中宮平產の御祈　三六四
四　光嚴帝花園後伏見兩上皇の行宮となる　三六五
五　佐々木六角氏の城館となる　三六七
六　佐々木氏在城時代の巡禮　三六八
七　元龜の兵燹と再建　三六九
八　塔婆建立と勸進　三六九
九　將軍家の祈禱　三七一
一〇　一山の坊舍　三七一
一一　寺領と諸役免除地　三七二

光善寺 三八二　榮順寺 三八二　慈恩寺 三八三
福生寺 三八三　東光寺 三八五　大圓寺 三八五
箕作山十三佛 三八六

第九節　武佐村　三八六

西願寺 三八六　西福寺 三八七　廣濟寺 三八七
長光寺 三八九
一　後光嚴帝三度び當寺に行幸し給ふ　三九一
二　應仁亂避難京僧の來寓　三九三
三　足利義晴の來寓　三九四
四　山科言繼飛鳥井雅敦の來宿　三九四
五　松平定綱の再興　三九四
照福寺 三九六　榮正寺 三九七　法泉寺 三九七
正明寺 三九八

第十節　馬淵村　三九八

妙經寺 三九九　圓願寺 四〇三　眞光寺 四〇四

福壽寺 四〇五
西來寺 四一〇
西耀寺 四一二
光瑞寺 四一七
萬願寺 四二〇
妙感寺 四〇七
易行寺 四一一
愛樂寺 四一二
玉養寺 四一七
寶養寺 四二一
中寺觀音堂 四〇九
冷泉寺 四一一
竹林寺 四一四
淨住寺 四一九

第十一節 鏡山村 四二一

光圓寺 四二二
眞照寺 四二三
大願寺 四二四
佛嚴寺 四二五
正光寺 四二六
眞淨寺 四二七
善休寺 四二七
阿彌陀寺 四二八
正福寺 四二九
釋迦堂(瑞光寺) 四二九
光明寺 四三二
善通寺 四三二
榮勝寺 四三三
三尊寺 四三四
光淨寺 四三四
圓覺寺 四三五
正念寺 四三六
阿彌陀堂(妙樂寺) 四三七
藥師堂 四三八
本誓寺 四三八
觀音寺 四三九
西善寺 四四一
光壽寺 四四一
吉祥寺 四四一
善正寺 四四四
光明寺 四四五

第十二章 苗村 四四六

正覺院 四四六
安樂寺 四五一
淨滿寺 四五一
毘沙門堂 四五二
東照寺 四五二
願長寺 四五三
光照寺 四五四
正行寺 四五五
常信寺 四五六
龍王寺 四五六
西光寺 四六四
安樂寺 四六五
西光寺 四六九
法蓮寺 四七二
眞光寺 四七二
永正寺 四七三

第十三節 平田村 四七四

淨光寺 四七四
福生寺 四七八
正壽寺 四八二
長樂寺 四八一
光明寺 四八二
勝善寺 四八七
德昌寺 四八八
光照寺 四九二
圓通寺 四九三

第十四節 市邊村 四九三

大蓮寺 四九三
法踊の祭 四九四
本啓寺 四九八
福命寺 四九九
羽木堂 四九九
地福寺 五〇〇
福壽寺 五〇〇
地福寺 五〇一

淨念寺 五〇一
第十五節 中野村
稱名寺 五〇二
南福寺 五〇七
蓮光寺 五一一
成願寺 五〇二
德圓寺 五〇七
五〇二
藥師堂 五〇八
引接寺 五〇八
第十六節 櫻川村
石塔寺 五一二
極樂寺 五二八
法森寺 五二九
五一二
源通寺 五三〇
得照寺 五三〇
敬念寺 五三一
敬圓寺 五三三
願成寺 五三四
稱名寺 五三七
福泉寺 五三八
日蓮寺 五三八
長德寺 五三九
蓮乘寺 五三九
第十七節 朝日野村
香積寺 五四〇
安樂寺 五四三
正養寺 五四三
五四〇
慶岸寺 五四四
專修寺 五四五
光明寺 五四六
誓安寺 五四七
立善寺 五五二
福泉寺 五五二

正善寺 五五三
觀音寺 五五三
安樂寺 五五三
吉善寺 五五五
願王寺 五五六
極樂寺 五五八
妙嚴寺 五五八
赤人寺 五六一
淨國寺 五七二
法雲寺 五七三
梵釋寺 五七四
圓通寺 五七六
東漸庵 五七六
涌泉寺 五七七
西誓寺 五八〇
蓮行寺 五八〇
第十八節 北比都佐村
潮音寺 五八一
西法寺 五八四
宗福寺 五八四
五八一
圓林寺 五八五
淨敎寺 五八六
金剛寺 五八七
大林寺 五八九
明性寺 五九〇
誓善寺 五九二
清德寺 五九三
法養寺 五九三
誓光寺 五九四
金剛定寺 五九七
一蒲生氏と當寺 五九九
光明院 六一〇
隆讚寺 六一一
欣誓庵 六一二
照光寺 六一二
攝取院 六一四
圓融寺 六一六

誓林寺 六一七　西圓寺 六一七　空善寺 六一八

第十九節　南比都佐村

盛願寺 六一九　法泉寺 六二一　清壽庵 六二一

眞龍寺 六二二　聞光寺 六二三　光延寺 六二五

靈松寺 六二六　安樂寺 六二九　西照院 六三〇

佛號寺 六三二

第二十節　鎌掛村

正法寺 六三三　光明寺 六三四　誓敬寺 六三五　六三三

專明寺 六三七

第二十一節　日野町　六三八

松林寺 六三八　長德寺 六三九　光臨寺 六四二

即往寺 六四三　法興寺 六四五　藥師堂 六四五

本誓寺 六四六　正覺寺 六四八　石藥師堂 六五〇

金剛寺 六五一　正明寺 六五三　淨光寺 六五七

本誓寺 六五八　毘沙門堂 六五九　西圓寺 六六〇

慈眼院 六六二　正崇寺 六六三　興仙寺 六六三

遠久寺 六六五　大聖寺 六六六　永福寺 六六七

晴明寺 六七〇　法性寺 六七一　信樂院 六七一

願證寺 六七七

第二十二節　西大路村

清源寺 六七八　興敬寺 六八五　光延寺 七〇八　六七八

法雲寺 七一一　聖財寺 七一七　教專寺 七一八

經王寺 七一九　常福寺 七二〇　神清寺 七二一

養泉寺 七二二　雲迎寺 七二三　藥師堂 七二四

聞空寺 七二四　寂照寺 七二五　澄禪庵 七二六

弘教寺 七二七　西明寺 七二八　本通寺 七五八

第二十三節　西櫻谷村　七五九

信樂寺 七五九　託仁寺 七六〇　光山寺 七六一

地藏寺 七六二　法光寺 七六二　慶安寺 七六三

安德寺 七六四　念法寺 七六四　藥師堂 七六八

第二十四節　東櫻谷村
仲明寺　七六八
願成寺　七七三
妙樂寺　七七九
普光寺　七七一
西法寺　七七五
安乘寺　七七二
應瑞寺　七七七
第二十五節　市原村
淨光寺　七八二
歸命寺　七八四
憶念寺　七八五
藥師堂　七九〇
淨源寺　七八二
西光寺　七八五
淨土寺　七八六
長壽寺　七八三
淨福寺　七八五
恩通寺　七八八
第二十六節　玉緒村
弘誓寺　七九一
養源寺　七九九
長福寺　八〇二
安樂寺　八一〇
慈眼寺　七九六
法藏寺　八〇一
妙應寺　八〇二
本光寺　八一二
攝待寺　七九七
極樂寺　八〇一
祥光寺　八一〇
瓦屋寺　八一三
第三章　廢寺志

香梅寺　八一六
安養寺　八一九
大福寺　八二五
永明寺　八二九
常樂寺　八三八
善福寺　八四〇
雲冠寺　八四二
椿寺趾　八四四
青蓮寺趾　八四八
金光院　八五〇
仁正寺　八五三
善通寺　八五八
西蓮寺　八六〇
壽長寺　八一八
阿彌陀寺　八二〇
德雲寺　八二六
慈恩寺　八三四
惠光寺趾　八三九
曼多羅堂　八四〇
妙樂寺　八四四
心卽院趾　八四四
諸願成就寺　八四九
成願寺趾　八五一
西方寺趾　八五四
蓮華寺趾　八五九
德林庵　八六三
龜泉院　八一九
三秀院　八二五
金剛寺　八二七
正覺院趾　八三七
安樂寺趾　八四〇
西方寺　八四一
圓光寺　八四四
眞福寺趾　八四七
宮井の古寺　八四九
藥王寺　八五二
萬德寺　八五五
二俣堂　八五九
善隆寺　八六四
第四章　八幡宮の回り念佛　八六六
第五章　國寶及特別保護建造物表　八六六

露光量違いの為重複撮影

第一節　國寶　八六七
第二節　特別保護建造物　八七二

近江蒲生郡志卷七目次終

寺院志

露光量違いの為重複撮影

寺院志

近江蒲生郡志卷七目次終

蒲生郡志卷七目次

第一節　國寶　八六七
第二節　特別保護建造物　八七二

近江蒲生郡志卷七

寺院志

總論

凡そ現在郡内の寺院は天台、眞言、淨土、禪、眞宗、日蓮宗等に大別し、分れて天台には山門派、眞盛派、眞言には古義新義淨土は鎮西派、禪宗には臨濟、曹洞、黄蘗、眞宗には本派、大谷派、佛光寺派、木部派興正寺派等各派に分ると雖も、遠き原始佛敎時代に逆れば無宗時代より創立せられ、奈良佛敎の盛時には法相、三論、華嚴等各宗寺院も所々に建てられたるは寺傳及び遺物によりて證明せらる、但し聖德太子の開基と稱する寺院には往々後世に創建し遠き聖德太子を迎へて開祖と仰ぎたる例あれば、太子創立の寺傳を以て悉く太子時代の草創と信ずべからず、天智天皇が大津宮に在せし時、百濟人鬼室集斯等七百餘人を蒲生の地に移住せしめ給ひしが、これ等多數の歸化人中には彼の國の佛像を將來して尊崇恭敬せしものありたり、されば蒲生の佛敎は大陸直輸入によりて早く弘通せしやも知る可からず、高麗、百濟人が將來せし佛像は其子孫に傳へ

護持佛としたるは、金柱御堂の本尊を高麗長者の護持佛と注せし元暦元年の注進風土記の文之を一證とすべし、而してそれに擬すべき所謂推古朝の佛像（百濟佛）は現に玉緒村慈眼寺に存して國寶となる（古代志に佛像寫眞挿入）

天平咸寶元年、聖武天皇が豐浦庄（安土村豐浦）の水田壹百町を大和の藥師寺に施入し給ひし以後、その支院は當庄に建てられたり、桑實寺を桑實藥師寺と稱するは即ちそれにて中古以來天台宗に屬すと雖も足利時代の末期猶藥師寺領の代官たりしは大乘院雜事記に見ゆる所なり、櫻川石塔寺の古寶塔は飛鳥時代の製作なりといへば其時代に於ける地方佛教の隆盛亦推測するに足る、中山（北比都佐村）の金剛定寺は奈良東大寺の實忠が開基と傳へば華嚴宗たるべく、市子庄は藤原氏の氏寺たりし興福寺領となり、接續する綺田庄、安吉庄等に亘る平野は早く藤原氏の莊園なれば、庄内寺院に奈良佛教の寺院も必ず多かりしならん、朝日野村大字宮井の古寺趾より出る瓦當の紋樣は推古朝式と鑑され、櫻川の綺田寺苗村川守の野寺馬淵村、倉橋、部岡山村船木等より出づる古瓦は何れも奈良朝時代のものなりと鑑さる、數へ來れば天台宗延暦寺の開基以前に於ける郡内佛教の有勢はこれ等遺物によりて歴々として髣髴せしむ、朝日野村宮川と苗村山の上に亘る地に法鏡寺の名を存し、東櫻谷の杉杣寺、西櫻谷の蓮華教寺、市原の莊嚴寺等は興福寺派下なりとの古圖を傳ふ、此等は大和人椿井某の作製せし模圖なり果して原圖の存在せしものなれば是亦法相宗たりし古刹なり、延暦中僧最澄が延暦寺を比叡山に建て空海が金剛峰寺を高野山に建て、天台眞言兩宗起り舊來の佛教に新旗幟を翻し年を追ふて漸く隆盛に向へり、近江國は天台山下なれば天台僧侶の接觸多く、朝廷及び皇族より莊園の施入は年を追ふて多く、沿湖の沃野水陸交通の要衝は殆と山門の勢下に屬したり、隨てこれ等莊園には天台寺院の建立、日吉神社の分祀行はれ、山門の勢力は續々地方に分植されたり、此時代に於て氣慨ある僧侶は辟遠の深山幽谷に草庵を結び世塵を謝して苦學練行し、年を重ねて後ち一寺を建立す、所謂山岳佛教枉盛となれり、綿向山下の西明寺、箱石山の雲冠寺、奥島山の阿彌陀寺等は即ち是なり。

御堂關白藤原道長及び其子孫が京都に六勝寺以下の巨刹を新立せし以後は從來藤原氏の莊園たりし地も分割して新興寺院に寄附され、やがて本寺附屬の支院も建立せらる、此時代郡内の寺院を概觀するに、東大寺、興福寺、藥師寺等寺領關係より、法相、三論、華嚴等奈良佛教は猶天台勢力の間に斑紋を彩り、眞言宗の寺も多少創立されたるべし、然れども當時の宗派なるものは決して後世の如く互に相固執したるものにあ

らず、一寺にして一宗をのみ弘むるにあらず、一人にして二宗三宗を兼ねざるもの稀なり、宗別は唯學解を主として分ちたるにて畢竟宗派の別を表するに非ず、唯所學の門を同じくせざるの謂にて學解佛教なり、眞言宗一派の本山たる仁和寺の起源を尋ぬれば天台の僧によりて草創せらる如き其一例證とすべし、

安元以後黑谷の源空、淨土他力の法門を唱へ門下の俊才輩出し教義漸く盛となり、關白藤原兼實も其德に服し外護の力多し、源空後年兼實の請により選擇集を編せり、源空の大乘圓戒は後白河、高倉、後鳥羽三帝も受戒し給ひし程なれば他力往生の教義は世を靡かさんとせり、當寺近江に於ける狀勢は史料を見ずと雖も、凡夫得生の教義は早く人心に投し歸嚮せし者少からざりしならん、南都北嶺の僧徒は漸く之を嫉み佛戒を輕し他宗を誹謗排斥すと稱し朝廷に奏して念佛を停止せんとするに至る、源空卽ち門下と連署し七箇條の起請文を製して山門に贈る、會ま源空の門下住蓮、安樂等別時念佛會を鹿谷に開く、後鳥羽上皇の宮人（鈴虫松虫）會に詣して出塵の念に禁べす自から落飾す、人之を上皇に讒し源空の徒私に宮女を度すとなす、上皇大に怒り承元元年二月住蓮、安樂を死罪に處し、源空を土佐に親鸞を越後に流す、住蓮の死罪に處せられんとするや、北面武士左衛門尉秀能をして近江に護送し之を馬淵に斬殺す、馬淵庄は延曆寺の千僧供料たりし所なり、住蓮が此地に斬首せられし理由今詳ならずと雖も、推想を當時に回せば一は山門の權威を張り一は淨土念佛の宗徒を辟易せしむる方策たりしや知る可からず、既にして僧榮西は臨濟禪を宋より傳へ、道元續て曹洞禪を傳ふ、鎌倉五山の禪刹は以後に振起して武士の歸依する所となる、京都にも聖一大應等の禪僧によりて禪宗振起し東福、建仁、南禪等の巨刹興る、佐々木氏は定綱以來近江守護として國內の名刹に祈願を托し寄捨物を爲す等の事多少の史料存すと雖も宗派に拘泥の痕跡なし、佐々木六角氏の祖泰綱の女高巖尼は佐々木西庄に永明寺を建て爾後佐々木氏の女尼となりて世襲せり、上蒲生に根據を有せし蒲生氏の一族も僧となり金剛定寺、金剛寺、西明寺、石塔寺等に住し、又延曆寺園城寺等に山僧となりしあり、兩豪族より出でし僧尼少からず、佐々木氏賴は南北朝戰亂時の近江守たり、觀應二年足利尊氏弟直義と兵を構へし時、氏賴去就に窮し世務を弟山內定詮に托し京都の西山に屏居し僧となり、天龍寺の疏石（夢窓國師）に歸して名を崇永と改め是より深く佛道に入れり、既にして父の爲に金田庄に金剛寺（金田河大字金剛寺）を建て疏石を招きて大供養を行ひ、母の爲に佐々木庄に慈恩寺を建て、又寂室（圓應禪師）を迎へて高野に永源寺を開基せし等造寺造佛の史蹟頗る多し、佐々木氏部下の將士亦之に傚ふあり近江に於ける禪宗頓

に隆盛に向へり、爾後佐々木氏の子孫は皆禪に歸す、久賴は相國寺の徒弟となり還俗して佐々木氏を嗣ぎ、定賴も同寺に喝食たり兄の病退により歸俗して宗家を嗣きし等氏賴以後の佐々木氏は代々禪宗信者たり、

源空の門より出てし親鸞は越後配流後五年を經て建暦元年十一月赦に遇ひ常陸國に移り稻田に住すること十年、元仁元年正月教行信證文類六卷を撰す之を淨土眞宗の開闢とす、十年を經て嘉禎元年八月、東國より美濃近江を過ぎ京に入り爾後二十餘年專ら述作に從事したり、郡內寺院の緣起に親鸞門下となりて一寺を開くと云ふもの眞なりせば此時代なるべし、然れども近江に於ける眞宗は八世蓮如の時より弘通したり、是より先き三世覺如の時代瓜生津（玉緒付大字瓜生津）に僧愚咄あり、早く眞宗の教義に歸す、建武三年京都の亂を避けし覺如は此地に來りて越年し、覺如の嫡子存覺は父の避難以前東國來往の途次再三此地に寓したる史蹟明瞭なれば他力本願念佛往生の教義は此頃既に郡內一部信者に歡喜せられたるを知るべし、（寺院志弘誓寺參照）應仁文明の亂は佐々木氏一族間の分爭となり、部下の將士黨を樹てゝ兩者に分屬す、爾後戰國時代連年の兵塵は各所に揚りて、古刹の灰燼するもの少からず、文明三年京を出でし蓮如は堅田に來り久しからずして越前吉崎に移住す、此頃蒲生貞秀に倚りて日野谷に幽棲せられし傳說存し、蓮如の遺蹟と稱する寺院數寺あり、寬政文化の頃には蓮如上人隱棲記さへ出版せらる、其他甲津畑淨源寺、冲島等郡內所々又同說を傳ふと雖も、本願寺其他に傳はる蓮如の動靜を記する記錄にはそれ等符合の記事發見なきを遺憾とす、（秘密の避難にして史料に見へざるか、又實如の時寺を建て、蓮如を追請開祖と仰ぎたりしが詳ならず）

蓮如の息實如に至り始めて正確の史料存す、所謂日野牧五ヶ寺、鎌掛の專明寺、武佐の廣濟寺、清田の藤澤氏等の佛像裏書は明應永正の間にして實如の署名せしものなり、されば郡內眞宗信徒の蔓延は蓮如實如の時代以後とす、

又親鸞門下より別れし錦織寺派あり、錦織寺は隣接せる野洲郡木部に在り、瓜生津に在りし愚咄は入りて其法燈を嗣きたり、郡內又此派下の寺院少からず、親鸞門下眞佛より五世の法系に了源あり佛光寺派を開く、當派の寺院も又郡內に存す。

日蓮宗は日像が京都に妙顯寺を建てし以後近江に弘通したるが如し、中仙道の交通に沿ふ馬淵村には同宗の寺院多く、而して其開祖を日像といふもの同宗發展の經路より見て主肯すべし、かくてその教義も年と共に擴張し享祿天文の頃には京都に於ける同宗二十一ヶ寺と稱するに見るも如何に其勢力の隆盛なりしを知るべし。

永祿十一年織田信長佐々木氏を敗りて近江に入り號令せんとす、佐々木氏及び其部

下の將士所在に蜂起して信長に抗す、延暦寺又淺井朝倉氏と通じ佐々木氏と連絡す、信長大に怒り佐々木氏の根據を絶滅せしめんと苟も佐々木氏縁故の武士邸宅を始め寺院等放火燒亡して殘す所なし、郡内の古刹其兵燹を免れしもの十の一に過ぎず、佐々木庄に在りし慈恩寺（安土村大字慈恩寺）は、氏頼入道が創建せし以來代々一族の菩提所として堂中に世々の廟堂羅列して輪奐の美を極めしも、應仁文明の亂一旦回祿し、高頼之を再興し、定頼、義賢に至り寺觀を加へたりしも、信長の一炬は更に一宇を存せず灰燼せしめ、慈恩寺の名は空しく地名に傳はるに過ぎず、既にして安土城に移りし信長は、淨土宗の僧應譽明感を栗太の金勝より呼び、比牟禮山下に在りし天台の古刹興隆寺の本堂を慈恩寺趾に移し住せしむ安土淨嚴院是なり天正七年五月信長は淨土、日蓮兩宗の僧を當寺に問答せしめ、日蓮宗を挫きて淨土宗に勝を制す有名なる安土宗論是なり、（安土時代志參照）

應仁文明の國亂、長享延德に足利氏の佐々木氏征伐、明應文龜の伊庭氏の亂等に地方大小の寺院灰燼せしもの頗る多く、これ等羅災の寺院は再建せらるゝあり、僅かに草庵に本尊以下を安置するあり、又全滅して傳はらざるものあるに、今又信長が佐々木氏關係全滅の一擧は更に嚴霜の威を以て假借する所なし、是れ實に寺院志上未曾有の大變革と謂ふ可し、鏡の西光寺、箱石の雲冠寺、山上の法鏡寺、尊乘寺、蒲生堂、宮井寺、綺田の成就寺、桐原の安養寺、安吉山の安吉寺、加茂の元福寺、奥島の阿彌陀寺、武佐の長光寺、小脇の金柱御堂、市原の莊嚴寺、池脇の長壽寺、櫻谷の杉杣寺、蓮華敎寺、日野の金剛寺、中山の金剛定寺等往古の名刹今存するもの幾許かある、此時に當り安土宗論の勝者たる淨土宗は獨り信長の保護によりて宗勢を擴張し、古寺の再興さるゝものは多く同宗に改め歸し、大成せし淨嚴院は近江に於ける淨土宗の總司として全盛三百有餘の末寺を附屬したり、平安朝以來天台宗の勢力たりし江南の地に淨土宗の擴張せしは實に安土宗論の結果にして信長に負ふ所頗る多し。

是より先き信長は石山本願寺と對抗し、本願寺の顯如は檄を諸國の門徒に移して一揆を催し所在蜂起して信長に抗す、甲賀、栗太、野洲の金森、神崎の建部、垣見等の一揆は江南に起り、佐々木氏と連絡して信長を苦しめ、日野牧五ヶ寺又常に氣脈を本願寺に通じ時に門徒を率ゐて石山の軍に參加す、信長が迫害を加へざりしは之を知らざりしか、將た蒲生氏根據にして深く憂ふるに足らざりし故歟。

信長は又安土城下に外國の宣敎師を迎へ邸宅を與ふ、部下の將士洗禮を受くる者多し、敎徒は又セミナリオを建てゝ武士の子弟を敎育し事業着々進捗せしに本能寺の

變によりて挫折せり、然れ共一旦蒔きし西教の種子は德川氏制禁の後に至るも萠芽を存して八幡及び老蘇等に破天連信者を出し火刑の慘を演出したり。

慶長七年德川家康本願寺を東西に分立して後、眞宗の新機運は大に揚り各地の門徒爭ひて道場を建て其宗に歸嚮す、郡內眞宗寺院の由緒に、古へ天台若くは眞言宗なりしが後眞宗の敎義に歸し轉宗せりといふものあり、又始め道場なりしが終に一寺を建て木佛寺號を許されたりといふあり、前者の說捨つ可からずと雖も後者の說最も眞なるべし。

明曆元年妙心寺の龍溪は明僧隱元を長崎より迎へ、將軍德川綱吉に謁し、宇治に黃蘗山萬福寺を建つ、之れ黃蘗宗の起源なり、寬文中龍溪は日野の正明寺に來り從來の臨濟寺を改め黃蘗宗とす、龍溪は蘗門の俊傑後水尾上皇の知遇を蒙り德望一世に高し、上皇爲に勅額を正明寺に下し賜へり、龍溪門下俊才出て正明寺頭黃蘗の旗幟高く閃き近隣の廢寺は續々同宗僧侶によりて再興せられ、又臨濟より轉ずるもありたり、同じ隱元門下の大眉より出でし梅嶺は比牟禮山下の土田正崇寺に入りて黃蘗を皷吹し、岩藏の福壽寺、神崎の正瑞寺等を開き、八幡の富豪伴氏西川氏等資を出して之を援く、上蒲生の黃蘗宗は日野に根據を堅め高井正野等の富豪之を援く、隱元門下の二流は郡の上下に分立して荒廢を興し同宗の寺院漸く多し。

以上郡內に於ける古來寺院の興亡を大觀し來れば、時代の變革に隨伴して消長し、屈折し、新陳代謝せし歷史は頗る頻繁たりき、本編に於ける廢寺史を讀みて現代寺院史を翫味すれば這中の消息は自から明かならん、但し現在寺院志中には史料を存せず止むなく寺傳のみに據りしものありて玉石混合の憾なしとせず、附記して讀者に告ぐ。

第一章　寺院佛堂表

第一節　天台宗

一　山門派

寺號	宗派	開基	年月	開祖名	所在地
願成就寺	天台山門派	推古天皇二十七年正月		傳燈大法師	岡山村大字小船木
圓珠寺	同上	不詳		不詳	同上加茂
願福寺	同上	不詳		不詳	同上同

東光寺	同上	不詳	不詳	桐原村東	一二
地福寺	同上	正德年中	應盛中興	同上池田	
醫王寺	同上	貞觀年中	玄仲和尚	同上古川	
旅庵寺	同上	不詳	不詳	宇津呂村中	
東福寺	同上	不詳	不詳	同上大林	
興隆寺	同上	推古天皇二十七年正月	聖德太子	同上多賀	
東照寺	同上	元和二年	不詳	同上	
延命院	同上	不詳	不詳	村奥島	
國清寺	同上	不詳	見了和尚	同上王ノ濱	
伊崎寺	同上	不詳	役行者	同上白部	
寶珠寺	同上	不詳	不詳	同上圓山	
長命寺	同上	不詳	聖德太子	同上長命寺	
妙覺院	同上	不詳	不詳	同上	
眞靜院	同上	不詳	不詳	同上	
寶光院	同上	不詳	不詳	同上	

金乘院	同上	不詳	不詳	同上	
禪林院	同上	不詳	不詳	同上	
穀屋寺	同上	不詳	春庭尼	同上	
福圓寺	同上	寬保元年	中興智潤	金田村鷹飼	
常照寺	同上	不詳	僧空心	同上西本鄕	
本福寺	同上	天明五年	不詳	同上淺小井	
東光寺	同上	不詳	善峰照雅	同上	
東南寺	同上	不詳	不詳	安土村上豐油	
平等寺	同上	不詳	不詳	同上	
桑實寺	同上	白鳳六年十一月		同上桑實寺	
正禪寺	同上	不詳	不詳	同上下豐浦	
西光寺	同上	不詳	不詳	同上	
稱名寺	同上	不詳	不詳	同上	
會勝寺	同上	不詳	不詳	同上	
觀音正寺	同上	推古天皇十三年	聖德太子	老蘇村石寺	

德萬坊	同上	天正十四年	中興德萬	同上	同
敎林坊	同上	天正十三年	中興宗德	同上	同
觀仙坊	同上	天正十四年	中興法順	同上	同
光善寺	同上	不詳	不詳	同上	同
正寶寺	同上	明應年中	中興眞源	同上	內野
光壽寺	同上	不詳	中興中阿上人	同	鏡山村岡屋
龍王寺	同上	和銅三年	僧行基	苗村川守	
安樂寺	同上	不詳	不詳	同上	信濃
勝善寺	同上	推古天皇十五年正月	聖德太子	平田村中羽田	
蓮華寺	同上	天和年中	中興最光	市邊村市邊	
地福寺	同上	天元二年卯春	不詳	同上	布施
南福寺	同上	應仁二年三月	不詳	中野村中野	
成願寺	同上	延曆十八年	不詳	同上	小脇
行滿坊	同上	不詳	不詳	同上	
石垣坊	同上	不詳	不詳	同上	

藥師寺	同上	天文三年	不詳	同上	
引接寺	同上	延曆六年	不詳	同上	今崎
石塔寺	同上	寬弘三年六月	聖德太子	櫻川村石塔	
赤人寺	同上	養老年中	山邊赤人	朝日野村下麻生	
法雲寺	同上	元祿年中	照影法師	同上	麻生
金剛定寺	同上	不詳	不詳	北比都佐村中山	
圓林寺	同上	不詳	不詳	同上	小谷
松林寺	同上	元和年中	道圓	日野町小井口	
長壽寺	同上	不詳	不詳	市原村池之脇	
造福寺	同上	不詳	聖德太子	同上	石谷
長福寺	同上	延曆二癸亥年九月	德珍法印	玉緒村下大森	

二 眞盛派

寺號	宗派	開基年月	開祖名	所在地
生蓮寺	天台眞盛派	不詳	不詳	岡山村大字加茂

西光寺	同上	不詳	不詳	同上	同上	一六
蓮光寺	同上	不詳	不詳	同上	同上	
善性寺	同上	元祿六年	中興入眞	同上	同上	
極樂寺	同上	不詳	不詳	同上	同上	
西方寺	同上	不詳	慈攝大師	同上	同上	
乘蓮寺	同上	不詳	不詳	同上	牧	
興願寺	同上	天文七年	眞海和尙	桐原村	中小森	
西福寺	同上	元文四年	中興寶昌	同上	竹	
光照寺	同上	不詳	不詳	同上	森尻	
菩提寺	同上	明和九年二月中興	敎山大法師	同上	古川	
湖東寺	同上	寶曆十三年二月中興	義圓	同上	同	
大光寺	同上	寬文四甲辰年中興	覺譽正吟	宇津呂村	土田	
西方寺	同上	天正丙子年	慈伯	島村	長命寺	
西來寺	同上	延德二年	眞盛上人	馬淵村	千僧供	
玉養寺	同上	天祿二辛未年	慈惠大師	同上	東川	
萬願寺	同上	不詳	同上	同上	同	
阿彌陀寺	同上	不詳	不詳	同上	鏡山村	弓削
正光寺	同上	不詳	不詳	同上	西川	
眞照寺	同上	不詳	不詳	同上	鏡	

第二節 眞言宗

寺號	宗派	開基年月	開祖名	所在地
長光寺	眞言宗	推古天皇甲寅年	武川綱	武佐村大字長光寺
安樂寺	同上	不詳	不詳	南比都佐村 下駒月
祥光寺	同上	不詳	不詳	玉緒村 柴原南

第三節 淨土宗

寺號	宗派	開基年月	開祖名	所在地
洞覺院	淨土宗	天正十四年	洞譽永宣	八幡町大字孫平治
願故寺	同上	天正十四丙戌年	寬譽上人圭山和尙	同上 博勞町

正福寺	同上	天正四年五月	靈譽上人玉念和尚	同上	魚屋町
慈恩寺	同上	天正十四丙戌年	洞譽永宣	同上	孫平治
正榮寺	同上	天正三乙亥年	善譽祐存	同上	池田
寶積寺	同上	天正十四年	覺祐和尚	同上	新町
永養寺	同上	正保二年三月	神譽滿秀	同上	西元
西運寺	同上	長祿三年	日譽牛雄上人	岡山村	小船木
願誓寺	同上	永正年間	映譽宗珍	同上	牧
西願寺	同上	天正十四年八月	應譽上人	同上	船木
嚴淨寺	同上	貞治三甲辰年十月	玉蓮社泉譽西阿和尚	同上	
祐嚴庵	同上	應永年中	祐嚴	同上	
常照寺	同上	天正十九年二月	常善和尚	桐原村	池田
莊嚴寺	同上	慶長九年正月	朝譽上人	同上	安養寺
西光寺	同上	天正七年十月	貞安大士	宇津呂村	中
壽德寺	同上	明曆二丙申年	專譽天興阿中	同上	多賀
三寶寺	同上	不詳	助譽玉念	島村	北津田

專稱寺	同上	承應二年八月	法譽上人	同上	
淨海寺	同上	大永年中	戒譽上人	同上	
常福寺	同上	不詳	不詳	同上	
海雲寺	同上	不詳	貞安上人	同上	圓山
清見寺	同上	不詳	貞安上人	同上	
專念寺	同上	不詳	從譽上人	同上	白王
福城寺	同上	不詳	福德法印	同上	中之庄
法恩寺	同上	不詳	不詳	金田村	鷹飼
應現寺	同上	不詳	不詳	同上	
地藏院	同上	弘治三年	宗阿上人	同上	金剛寺
光明院	同上	永祿年中	應譽明感	同上	
永福寺	同上	不詳	不詳	同上	長田
正壽院	同上	永正五年	巖譽上人	同上	淺小井
淨嚴院	同上	天正年中	隆堯法印	安土村	慈恩寺
正念寺	同上	弘治三年十一月	不詳	同上	小中

東光寺	同上	大永二年	不詳	老蘇村	西老蘇
福生寺	同上	天正十六年	小阿上人	同上	東老蘇
淨宗院	同上	文明年中	隆阿上人	武佐村	武佐
西福寺	同上	天正五年三月	應譽上人	同上	西生來
法性寺	同上	不詳	中興僧正覺	同上	長光寺
法泉寺	同上	承應年間	不詳	同上	野田
眞光寺	同上	文明十六甲辰年	嚴譽宗眞	馬淵村	馬淵
寶養寺	同上	文永五年	不詳	同上	東横關
光明寺	同上	天和年中	中興賢譽	鏡山村	山中
吉祥寺	同上	不詳	中興還譽	同上	岡屋
善正寺	同上	寛永五戊辰年	一夢露秀	同上	同
善法寺	同上	不詳	中興聲譽	同上	小口
正念寺	同上	不詳	中興安譽	同上	藥師
淨泉寺	同上	天正年中	中興法堯	同上	西横關
西光寺	同上	不詳	不詳	苗村	山之上

眞光寺	同上	正保元年	僧說顏	同上	同
永正寺	同上	慶長二年三月	僧天序	同上	同
正覺院	同上	元文三年	中興聲譽	同上	綾戸
光明寺	同上	不詳	不詳	平田村	下羽田
圓通寺	同上	不詳	不詳	同上	上羽田
大蓮寺	同上	慶長五庚子年	中興圓譽虛舟	市邊村	市邊
法德寺	同上	貞和年中	玉譽淨泉	同上	同
福命寺	同上	天正十九年辛卯年	不詳	同上	蛇溝
福壽寺	同上	元弘二壬申年	普寂國師	同上	布施
地福寺	同上	不詳	不詳	同上	糠塚
德圓寺	同上	永祿五年八月	詫譽淨願	中野村	中野
來迎院	同上	應永年間	中興致山	同上	小脇
稱名寺	同上	不詳	不詳	同上	小今
蓮光寺	同上	正德三年五月	心譽正察	同上	今堀
極樂寺	同上	永祿七年四月	中興夢傳	權川村	石塔

法森寺	同上	寛永七年	中興圓達	同上平林
蓮乘寺	同上	元享年中	普寂國師	同上稲垂
稱名寺	同上	寛永二十年	名譽惑心	同上川合
福泉寺	同上	寛正年中	榮玉僧尼	同上同
淨國寺	同上	慶長八年	休山法師	朝日野村上麻生
西誓寺	同上	永正年中	聖元法師	同上鑄物師
圓通寺	同上	不詳	不詳	同上岡本
吉善寺	同上	正和年中	鈴村玄蕃	同上鈴
光明寺	同上	元祿元辰年	中興太春	同上蒲生堂
專修寺	同上	天正二乙亥年	中興宗貞	同上宮川
正養寺	同上	文祿年間	善求比丘	同上外原
慶岸寺	同上	慶長元年六月	慶岸比丘	同上宮井
安樂寺	同上	不詳	不詳	同上葛卷
永福寺	同上	元龜二年	正達大德	同上横山
誓安寺	同上	天正十四年四月	誓譽永順	同上合戸

大圓寺	同上	慶長年間	永阿和尚	同上市子殿
攝取院	同上	享祿三年六月	僧忍譽	北比都佐村内池
隆讃寺	同上	不詳	恩譽眞源	同上中山
誓光寺	同上	寶德二年	高譽大德	同上三十坪
金剛寺	同上	不詳	不詳	同上小御門
淨敎寺	同上	不詳	不詳	同上同
宗福寺	同上	天正年間	不詳	同上小谷
誓善寺	同上	不詳	光譽久阿	同上増田
光明院	同上	不詳	光阿彌陀佛	同上中山
欣誓庵	同上	慶安年中	僧欣誓	同上同
清壽庵	同上	天正七年	僧清壽	南比都佐村上迫
西照院	同上	不詳	不詳	同上下駒月
信樂院	同上	享保十九年再建	見譽	日野町村井
大聖寺	同上	不詳	不詳	同上大窪
新善光寺	同上	文久二年正月	淨善	同上上野田

法雲寺	同上	天正十二年三月	法雲	西大路村	西大路
常福寺	同上	不詳	不詳	同	上仁本木
雲迎寺	同上	不詳	中興忍徹	同	上音羽
澄禪庵	同上	元祿十二年	澄禪	同	上平子
瑞華院	同上	延寶五年	中興眞入	同	上同
淨福寺	同上	不詳	不詳	市原村	高木
淨土寺	同上	永正元癸子年	僧緣譽	同	上市原野
攝待寺	同上	慶長七丙寅年	僧玄正	玉緒村	土器
法藏寺	同上	享祿年間	洞幸法師	同	上下大森
極樂寺	同上	正和五丙辰年	僧玉泉	同	上同
安樂寺	同上	不詳	不詳	同	上柴原南

第四節　淨土眞宗

一　本派

寺號	宗派	開基年月	開祖名	所在地
本願寺別院	眞宗本派	文祿元年	顯如上人	八幡町大字北元
圓宗寺	同上	不詳	不詳	岡山村加茂
淨光寺	同上	不詳	中興敎祐	同上同
稱念寺	同上	永正十四年	不詳	同上田中江
稱名寺	同上	永正九年	不詳	同上同
善性寺	同上	天正九年	不詳	同上同
金照寺	同上	不詳	覺眞	同上大房
長誓寺	同上	慶長十甲子年	不詳	同上船木
覺永寺	同上	永正七年十二月	了西	桐原村中小森
古齋寺	同上	寶永五年六月	眞悅	同上古川
眞成寺	同上	寬和二丙戌年	原田安盛了正	宇津呂村土田
願通寺	同上	不詳	不詳	同上大林
西福寺	同上	永正十二年六月	西了	島村冲ノ島
願證寺	同上	文明三年	願生	同上同

明光寺	同上	天文元年	僧立音	金田村上田
元稱寺	同上	明應六年	圓西	同上同
西常寺	同上	不詳	圓歡	同上同
淨道寺	同上	不詳	不詳	同上杉森
法圓寺	同上	不詳	不詳	同上西庄
敎稱寺	同上	延德元年	僧了春	同上同
西性寺	同上	永正元年三月	中興善西	安土村常樂寺
永照寺	同上	不詳	中興宗因	同上同
善德寺	同上	不詳	不詳	同上同
光明寺	同上	不詳	不詳	同上宮津
廣濟寺	同上	推古天皇二年二月	聖德太子	武佐村武佐
淨光寺	同上	不詳	再興休可	同上友定
照福寺	同上	不詳	再興空心	同上御所內
易行寺	同上	永正十年	善通	馬淵村千僧供
善通寺	同上	天文二十一年	僧覺立	鏡山村須惠

法蓮寺	同上	不詳	不詳	苗村山之上
東光寺	同上	不詳	不詳	同上川守
光照寺	同上	不詳	不詳	平田村上羽田
敬念寺	同上	不詳	不詳	櫻川村上小房
得照寺	同上	天正年中	了意上人	同上寺
圓光寺	同上	不詳	僧來	朝日野村市子殿
安樂寺	同上	不詳	不詳	同上市子冲
正善寺	同上	文龜年間	西心	同上市子川原
圓融寺	同上	大永年中	僧正西	北比都佐村猫田
清德寺	同上	不詳	僧信厥	同上三十坪
西法寺	同上	不詳	不詳	同上小谷
光淨寺	同上	不詳	不詳	同上豊田
閑光寺	同上	文明年間	僧道明	南比都佐村清田
光延寺	同上	文明年中	僧盈仲	同上同
誓敬寺	同上	永正十年二月	西願	鎌掛村鎌掛

光明寺	同上	不詳	不詳	同上	同上
光臨寺	同上	永正九年	最勝	日野町寺尻	
即往寺	同上	不詳	僧了敎	同上木津	
西圓寺	同上	寛正六年	格善	同上大窪	
正崇寺	同上	不詳	圓鸞	同上	
興仙寺	同上	不詳	稻田又六	同上	
遠久寺	同上	文明年間	不詳	同上	
永福寺	同上	不詳	圓順尼公	同上	
本誓寺	同上	文政四年再建	覺如	同上松尾	
正覺寺	同上	大永二壬申年	僧光信	同上上野田	
聖財寺	同上	永德元年	善慶	西大路村西大路	
信樂寺	同上	元和二年七月	惠林	西櫻谷村蓮華寺	
慶安寺	同上	不詳	不詳	同上北脇	
願成寺	同上	慶長二年	僧超空	東櫻谷村鳥居平	
普光寺	同上	慶長六年十一月	釋靈道	同上佐久良	

淨光寺	同上	應永十八年三月	圓海	市原村甲津畑	
淨源寺	同上	文明五年十一月	黑川秀賢	同上同	
歸命寺	同上	不詳	不詳	同上上二俣	
西光寺	同上	不詳	不詳	同上高木	
憶念寺	同上	不詳	不詳	同上同	
弘誓寺	同上	不詳	願名坊宗信	玉緒村瓜生津	
本光寺	同上	延寶元年十一月	釋玄古	同上芝原	

二 大谷派

寺號	宗派	開基年月	開祖名	所在地
順應寺	眞宗大谷派	不詳	不詳	八幡町字大工町
蓮照寺	同上	不詳	宣如上人	同上玉木町
眞念寺	同上	天文年間	釋長春	岡山村南津田
順念寺	同上	不詳	釋眞空	同上同
德行寺	同上	寛文二年	釋雲光	桐原村池田西

遍照寺	同上	正保元年	實泉	同上八木
敎信寺	同上	安政六年四月	不詳	同上中小森
佛願寺	同上	明治三十三年四月	不詳	同上同
舊緣寺	同上	寛文年中	元智	同上比之庄
西敎寺	同上	不詳	不詳	金田村金剛寺
爲形寺	同上	不詳	不詳	同上長田
德應寺	同上	不詳	不詳	同上西庄
法福寺	同上	永仁年中	徹然	安土村常樂寺
善德寺	同上	白雉四年	宗元	同上同
西法寺	同上	不詳	不詳	同上中屋
榮順寺	同上	不詳	不詳	老蘇村石寺
淨敬寺	同上	不詳	不詳	同上清水鼻
大圓寺	同上	永正十七年	善正	同上內野
西願寺	同上	不詳	中興敎圓	武佐村西生來
明淨寺	同上	寛文二年三月	中興空心	同上西宿

榮正寺	同上	不詳	中興智隆	同上御所內
正明寺	同上	不詳	不詳	同上南野
圓願寺	同上	天正十年辛巳年	中興敎順	馬淵村馬淵
西耀寺	同上	大寶二年	西耀和尙	同上倉橋部
愛樂寺	同上	慶雲二年	僧行基	同上同
光瑞寺	同上	永正九壬申年	了光	同上上畑
西善寺	同上	一條天皇御宇	再興佐々木吉英	鏡山村岡屋
善休寺	同上	正保三年	了傳	同上弓削
光淨寺	同上	不詳	中興一念	同上鵜川
佛嚴寺	同上	不詳	僧行基	同上山面
光照寺	同上	中興大永元年	不詳	苗村林
願長寺	同上	寛正年間	僧惠恩	同上庄
本啓寺	同上	弘安五年二月	宗實	市邊村蛇溝
淨念寺	同上	延寶九壬申年	不詳	同上野口
源通寺	同上	不詳	不詳	櫻川村綺田

敬圓寺	同上	不詳	不詳	同上	下小房
蓮行寺	同上	慶安年中	了賢法師	朝日野村	鑄物師
福泉寺	同上	天文年中	敬善	同上	上南
照光寺	同上	不詳	中興了明	北比都佐村	內池
空善寺	同上	寛保二年	僧聞隆	同上	十禪師
西圓寺	同上	元龜三年十月	僧道覺	同上	同
明性寺	同上	長德五年	中興寂應	同上	增田
法養寺	同上	不詳	不詳	同上	三十坪
盛願寺	同上	永正年間	僧玄閑	南比都佐村	別所
眞龍寺	同上	不詳	不詳	同上	迫
法泉寺	同上	不詳	僧惠秀	同上	同
佛號寺	同上	不詳	不詳	同上	上駒月
專明寺	同上	不詳	法善	鎌掛村	
晴明寺	同上	正德三年	不詳	日野町村	井
法性寺	同上	寛保二年	僧行證	同上	同

願證寺	同上	天正二年九月	佐堯	同上	同
智敎寺	同上	不詳	吉村一角	同上	塗師町
本誓寺	同上	不詳	行基	同上	日田
法興寺	同上	不詳	岡左內	同上	木津
興敬寺	同上	應永二年	圓鸞	西大路村	西大路
光延寺	同上	延寶九年	增田重程	同上	同
敎專寺	同上	不詳	敬善	同上	同
眞入寺	同上	元龜四年二月	不詳	同上	仁本木
養泉寺	同上	元龜四年七月	蒲生秀順	同上	音羽
聞空寺	同上	應仁元年五月	聞信	同上	藏王
弘敎寺	同上	文安四年三月	僧實圓	同上	北畑
本通寺	同上	文正元年	善齊	同上	西明寺
念法寺	同上	天正十二年五月	河原五郎右衛門	西櫻谷村	安部居
安德寺	同上	正長二年	中興道悅	同上	北脇
光山寺	同上	不詳	不詳	同上	中在寺

託仁寺	同上	萬治三庚午年	超玄	同上野出
應瑞寺	同上	不詳	道開法師	東櫻谷村杉
安乘寺	同上	元和七年	釋受傳	同上中之郷
恩通寺	同上	不詳	不詳	市原村市原野

三 木部派

寺號	宗派	開基年月	開祖名	所在地
善住寺	眞宗木部派	不詳	不詳	八幡町大字小幡
淨寶寺	同上	不詳	不詳	岡山村加茂
淨福寺	同上	永祿七年	光證	同上牧
正福寺	同上	天正六年	印藏	宇津呂村宇津呂
德法寺	同上	不詳	不詳	同上大林
帝釋寺	同上	享和元辛酉年	達傳	同上市井
西照寺	同上	安永丙申年	榮全	同上北之庄
金圓寺	同上	不詳	不詳	金田村長田

圓光寺	同上	永正年中	中興閑西	同上西庄
常福寺	同上	不詳	不詳	安土村香庄
淨住寺	同上	寶治六年十二月	知客	馬淵村東川
三尊寺	同上	文和年中	僧圓海	鏡山村橋本
眞淨寺	同上	不詳	不詳	同上西川
善明寺	同上	天安二年	善妙和尙	苗村岩井
正行寺	同上	康正元年	僧淸玄	同上林
常信寺	同上	寛文十一年	僧源齋	同上同
淨光寺	同上	不詳	不詳	平田村上平木

四 佛光寺派

寺號	宗派	開基年月	開祖名	所在地
西方寺	眞宗佛光寺派	推古天皇二十七年三月	聖德太子	八幡町大字孫平治
信行寺	同上	寛永年中	善西	岡山村加茂
正覺寺	同上	應永丙子年	敎善	同上南津田

正福寺	同上	不詳	詳不	同上	牧上	
蓮光寺	同上	延德元年	中興淨慶	同上	大房	
重願寺	同上	享保八年三月中興	不詳	桐原村	古川	
西源寺	同上	不詳	詳不	同上	同	
佛性寺	同上	不詳	詳不	金田村	淺小井	
光明寺	同上	元弘元年六月	光圓	鏡山村	川上	
圓覺寺	同上	建武年中	了長	同上	七里	
正福寺	同上	不詳	知教	同上	弓削	
榮勝寺	同上	慶長四年	僧道法	同上	須惠	
本誓寺	同上	不詳	再興光哲	同上	小口	
光圓寺	同上	不詳	同	上	西横關	
大願寺	同上	不詳	同	上	鏡	
西光寺	同上	中興貞享年中	不詳	苗	村川守	
常信寺	同上	寛文十一年九月	僧源齋	同	上林	
淨滿寺	同上	不詳	詳不	同	上田中	
福生寺	同上	不詳	詳不	平田村	上中木	
長德寺	同上	不詳	詳不	櫻川村	木	

五 興正寺派

寺號	宗派	開基年月	開祖名	所在地
正圓寺	眞宗興正寺派	文正元年二月	光專	金田村大字上田
誓寺	同上	建暦二壬申年	見眞大師	鏡山村小口

第五節 禪宗

一 臨濟宗

寺號	宗派	開基年月	開祖名	所在地
東漸寺	臨濟宗	寛永十癸酉年	速源和尚	宇津呂村大字大林
圓滿寺	同上	享保七年九月	圓滿廣照	同上多賀
摠見寺	同上	天正年中	正仲剛可座元	安土村下豐浦 安土山上
竹林寺	同上	貞治三丙申年	不詳	馬淵村淨土寺

觀音寺	同上	不詳	不詳	鏡山村小口	
安樂寺	同上	享保十七年	謙岩西堂	苗村岩井	
德昌寺	同上	不詳	眉山隆和尚	平田村上羽田	
長樂寺	同上	不詳	聖德太子	同上（下平木）	
正壽寺	同上	不詳	中興湖南	同上柏木	
涌泉寺	同上	文安二年八月	不詳	朝日野村鑄物師	
東漸庵	同上	寶曆年中	靈泉	同上岡本	
香積寺	同上	和銅年中	圓通大師	同上横山	
觀音寺	同上	推古天皇御宇	聖德太子	同上市千松井	
大林寺	同上	不詳	不詳	北比都佐村小御門	
靈松寺	同上	不詳	中興僧一絲	南比都佐村深山口	
正法寺	同上	天平勝寶元年	行基	鎌掛村鎌掛	
清源寺	同上	元和年間	不詳	西大路村西大路	
神清寺	同上	明和三年五月	道淳	同上音羽	
寂照寺	同上	不詳	僧寂照	同上藏王	

西明禪寺	同上	天喜元年	聖德太子	同上西明寺	
親省庵	同上	元祿七年八月		同上同	
妙樂寺	同上	寛永二年三月	擔道禪師	東櫻谷村川原	

二　曹洞宗

寺號	宗派	開基年月	開祖名	所在地	
冷泉寺	曹洞宗	天正十五年	滿庵和尚	馬淵村大字千僧供	
願成寺	同上	寛永元年	三榮本秀	櫻川村川合	
願王寺	同上	不詳	不詳	朝日野村大森	
極樂寺	同上	不詳	不詳	同上田中	
妙嚴寺	同上	明暦元未年	三榮禪師	同上大塚	
慈眼院	同上	不詳	不詳	日野町大窪	
金剛寺	同上	延享三丙寅年	僧懷州	同上大谷	
法光寺	同上	不詳	不詳	西櫻谷村北脇	
仲明寺	同上	不詳	寶澄	東櫻谷村佐久良	

慈眼寺	同上	延寶二年六月	天瑞乾澤	玉緒村瓜生津	
養源寺	同上	不詳	中興滿庵天允	同上上大森	
妙應寺	同上	正慶元壬申年	德鎮法印	同上尻無	

三 黃蘗宗

寺號	宗派	開基年月	開祖名	所在地
妙法寺	黃蘗宗	不詳	仙林和尚	八幡町大字鐵砲町
正宗寺 國禪寺	同上	延寶六年十一月	大眉和尚	宇津呂村土田
寬太禪寺	同上	不詳	泰岳大和尚	同上同
延命寺	同上	不詳	華頂禪師	島村奥島
慈恩寺	同上	應安年中	寂門和尚	老蘇村清水鼻
福泉庵	同上	安永年中不詳	月峰淨照	同上東老蘇
福壽寺	同上	永寶七年己未	梅嶺和尚	馬淵村馬淵
東照寺	同上	元祿十六年二月	同上	苗村駕輿丁
恩林寺	同上	貞享三年	西江和尚	平田村上羽田

梵釋寺	同上	不詳	朝日野村岡本		
潮音寺	同上		北比都佐村石原		
禪林寺	同上	天祿年中	中興僧晦翁	同上猫田	
長德寺	同上	延寶五丁己年	獨湛和尚	日野町寺尻	
淨光寺	同上	不詳	同上	同上河原	
正明寺	同上	不詳	同上	同上松尾	
西禪寺	同上	不詳	不詳	玉緒村柴原村	

第六節 日蓮宗

寺號	宗派	開基年月	開祖名	所在地
蓮經寺	日蓮宗	寬永六年	不詳	八幡町大字孫平治
淨國寺	同上	不詳	日像	岡山村牧
妙感寺	同上	永仁四丙申年	日像	馬淵村馬淵
妙經寺	同上	文保二年三月	日像	同上長福寺
立善寺	同上	寬永十一年三月	日遙	朝日野村合戶

經王寺　同上　明治十三年　西大路村　西大路

第七節　佛堂

堂名	宗派	開基年月	開祖名	所在地
藥師堂	不詳	不詳	不詳	八幡町五丁目
藥師堂	天台宗	不詳	不詳	岡山村字大田中江
地福寺境內觀音堂	不詳	不詳	不詳	桐原村池田
莊嚴寺境內釋迦堂	不詳	不詳	同	上安養寺
同地藏堂	不詳	不詳	不詳	上同
行者堂	不詳	不詳	不詳	上同
地藏堂	天台宗眞盛派	不詳	同	上中小森
觀音堂	不詳	不詳	不詳	宇津呂村北之庄
石藥師堂	不詳	不詳	同	上土田
弘法大師堂	不詳	不詳	岩田太兵衛	金田村金剛寺
釋迦堂	不詳	不詳	同	上長田
釋迦堂	不詳	不詳	同	上淺小井
地藏堂	不詳	不詳	同	上同
行者堂	不詳	不詳	安土村小中	
觀音堂	天台宗	不詳	吉田嚴秀	同上常樂寺
湖見堂	不詳	不詳	同	上上豐浦
八日堂	不詳	不詳	同	上同
辨天堂	不詳	不詳	同	上下豐浦
觀音堂	不詳	不詳	同	上同
十三佛	天台宗	推古天皇御宇	不詳	老蘇村內野
福泉庵	黃蘗宗	不詳	同	上東老蘇
觀音堂	天正十三年辛己		行基	馬淵村馬淵
妙見堂	不詳	不詳	同	上長福寺
藥師堂	不詳	不詳	同	上千僧供
曼多羅堂	不詳	不詳	同	上同
觀音堂	淨土宗	推古天皇六年	不詳	鏡山村岡屋

釋迦堂	不詳	不詳	同	上弓削
阿彌陀堂	不詳	不詳	同	上藥師
藥師堂	不詳	不詳	同	上同
行者堂	不詳	不詳	同	上山中
不動岩屋	不詳	不詳	同	上藥師
普賢堂	不詳	不詳	同	上橋本
藥師堂	文和年中	不詳	同	上同
地藏堂	不詳	不詳	同	上同
觀音堂	不詳	不詳	同	上須惠
仁王尊	不詳	不詳	同	上鏡
庚申堂	不詳	不詳	苗	村山之上
觀音堂	不詳	不詳	同	上同
觀音堂	不詳	不詳	同	上川守
大日堂	不詳	不詳	同	上林
阿彌陀堂	不詳	不詳	同	上信濃

地藏堂	不詳	不詳	同	上、岩井
地藏堂	天正二年	僧元錄	同	上駕輿丁
觀音堂	不詳	不詳	同	上島
不動堂	不詳	不詳	同	上綾戸
毘沙門堂	不詳	不詳	同	上田中
觀音堂	不詳	不詳	平田村	上中木
役行者堂	不詳	不詳	同	上羽田
藥師堂	不詳	不詳	市邊村	蛇溝
羽木堂	不詳	不詳	同	上同
藥師堂	不詳	不詳	中野村	今崎
圓通庵	不詳	不詳	櫻川村	川合
藥師堂	不詳	不詳	同	上同
役行者堂	嘉永三年	不詳	同	上同
大日堂	不詳	不詳	北比都佐村	內池
大日堂	明和年中再建	不詳	同	上中山

地藏堂		明治十三年再興	不詳	南比都佐村	迫
地藏堂		建長年中建立	不詳	同上	下駒月
大日堂		文政年間	不詳	鎌掛村	
大師堂		文政十一年七月	不詳	日野町大窪	
毘沙門堂	黄蘗宗	延寶七年	島崎了善	同上	松尾
如來堂		文久二年正月	不詳	同上	上野田
藥師堂		正德二年十月再建	不詳	同上	
乾明堂		寛政十一巳未年	僧義門	同上	
藥師堂		文化年中再建	不詳	同上	木津
藥師堂		嘉永壬子年四月	不詳	同上	日
大日堂		元和年中	不詳	西大路村	西大路
野堂	法雲寺預り	貞享年中	不詳	同上	
藥師堂		天正年中	不詳	同上	音羽
地藏堂			不詳	西櫻谷村	蓮花寺
廣照庵			不詳	同上	中在寺

藥師堂			不詳	同上	安部居
地藏堂			不詳	同上	中在寺 上ノ平 里中 小山代
地藏堂			不詳	同上	北脇 東出 中踊 村場 野谷 前
地藏堂			不詳	同上	野出 精靈堂
地藏堂			不詳	同上	安部居 大蓮寺 フロノ坂 クルベキ 川原出

第八節　廢寺

廢寺及廢寺趾名	宗派	開基年月	開祖名	廢止年月	所在地
香梅寺	天台宗	寛弘二年	智遍	明治初年	岡山村 大字船木
成願寺	不詳	不詳	不詳	不詳	同上
壽長寺	同上	不詳	不詳	不詳	同上
龜泉院	禪宗	寛永年中再興	玉質和尚 再興	明治初年	桐原村 中小森 桐原郷
安養寺		不詳	不詳	不詳	同上
阿彌陀寺	天台宗	不詳	僧賢和	不詳	島村 北津田

三秀院	臨濟宗	不詳	不詳	不詳
大福寺		不詳	不詳	不詳
德雲寺		不詳	不詳	不詳
金剛寺		正平七年	佐々木崇永	不詳
永明寺		不詳	不詳	不詳
慈恩寺		不詳	佐々木崇永	不詳
正覺院趾		不詳	不詳	元文三年
常樂寺		不詳	不詳	不詳
惠光寺趾		不詳	不詳	不詳
安樂寺趾		不詳	不詳	不詳
善福寺		不詳	不詳	不詳
妙樂寺		不詳	不詳	不詳
圓光寺		不詳	不詳	不詳
雲冠寺		推古天皇六年	聖德太子	不詳
西方寺		弘仁九年二月	傳教大師	不詳

同上奥島
同上白王
同上圓山
金田村金剛寺
同上西庄
安土村慈恩寺
同上桑實寺
同上常樂寺
老蘇村石寺
武佐村西生來
馬淵村倉橋部
鏡山村藥師
同上七里
同上箱石山上
同上鏡

椿寺趾		不詳	不詳	不詳
眞福寺趾		不詳	不詳	不詳
心即院趾		不詳	通元泰公	不詳
靜蓮寺趾		不詳	不詳	不詳
宮井の古寺		不詳	不詳	不詳
金光院		不詳	不詳	不詳
成願寺趾		不詳	不詳	不詳
藥王寺		不詳	不詳	不詳
仁正寺		不詳	不詳	不詳
西方寺趾	臨濟宗	文和二年	寺倉氏	永享三年
善通寺		寶龜四年	僧善珠	不詳
蓮華寺趾		不詳	不詳	不詳
西蓮寺		不詳	不詳	不詳
德林庵		不詳	不詳	不詳
善隆寺		不詳	不詳	不詳

平田村上羽田
市邊村糠塚
同上布施
中野村小脇
朝日野村宮井
北比都佐村中山
南比都佐村別所
西大路村西大路
同上同
西櫻谷村安部居
東櫻谷村中之郷
同上小野
玉緒村柴原南
所在不明
所在不明

第二章　寺院由緒

第一節　八幡町

洞覺院

洞覺院は八幡町大字孫平治町に在り慈恩寺と號す淨土宗なり、安土淨嚴院の應譽明感の高足洞譽永宣天正三年安土町に一宇を建つ之れ當寺の創立なり、同十四年八幡町の成立に隨ひ移轉す、同十五年十一月十一日八幡山城主豊臣秀次の息女玉姫卒去す秀次之を當寺に葬る謚して正壽院殿利貞童女といふ、秀次は寺隣の荒地五段歩餘を當寺に附與し位牌堂を建てゝ釋迦如來の古佛と位牌とを安置す、同像内に舍利一粒と銘札とを納む銘札に

元亨三年癸亥四月三日始之同五月三日結願

願主　沙彌性佛

佛所　立花法橋竹有

と記す數百年前の古佛なり童女の位牌には

正壽院殿利貞童女　天正十五丁亥十一月十一日

裏　關白秀次公御姫君

と記さる、境内五段三畝十八歩は除地となり明治維新に至れり、安永七年諦譽酉阿の時洪鐘を鑄造す銘文左の如し。

二四二一　鐘　銘

江州蒲生郡八幡。

安永七年二月十五日

金見山洞覺院十世　諦譽酉阿代

願主　惣檀那中

他力建立

世話人　柴屋惣八

同國栗太郡高野庄、辻村

治工　太田西兵衛恒次

二四二一／一　本堂棟札

天下和順　寶永第三戊年　施主諸檀那中

奉建立金見山洞覺院第六世然蓮社常譽廓然和尚願成就所

日月清明　十月十五日　時之念佛講中

大工　高木亦重郎之尉常方

本願寺別院

眞宗本派本願寺別院は八幡町大字寺内町に在り、當寺は始め本願寺光佐（顯如上人）の時安土城下に建立し信長は寺地六町を與ふ（按するに天正八年信長と光佐と平和せし後ちなるべし）後信長安土の民家を蒲生野に移さんと欲する計畫あり當寺の寺地又四境に牓示を建てしに本能寺の變ありて果さざりき、同十四年羽柴秀次八幡山城を築くに當り安土の民家を移轉せしむ當寺も亦移轉す、秀次信長の先例に倣ひ寺地六町を與ふ、文祿元年移轉切就り准如京都より下りて遷佛供養を修す、六町の地を寺内と稱し所得は當寺の收入なり、慶長五年九月關ヶ原に大捷せし德川家康は上洛の途十八日當寺に宿す、寛永十一年德川家光上洛の時又家康が吉例の宿なりとて當寺に入れり、爾後朝鮮人來聘通行の時毎に當寺は正使の晝食所に宛てられたり、元祿十三年本願寺寂如の時本堂を再建す是れ現

在の建物なり、慶長撿地以後境内五段五畝廿六歩は除地となり餘の寺内町は租地となる、元祿十年墓地貳段三畝七歩を除地に加へらる、表門前に恭敬寺あり裏門前に西林寺あり配下の寺數二十八ヶ寺ありたり。

當寺太鼓樓に掛る太鼓は永德二年正月紀伊國池田庄福林寺に於て製作せし古太鼓なり、胴經二尺二寸口經二尺五寸欅を以て作る、大正三年十月偶々史料調査の爲め宇津呂村大林に到りしに古色愛すべき太鼓の張替中なるに會し胴内に文字なきやを問ひしに滿面に記し在りと聞き工を中止せしめ左記の銘文を寫し更に第六銘を記入し與へたり、永德は南北朝時代にして大正三年を去ること五百四十三年前にして貴重すべき時代品なり、今紀伊國那賀郡池田村大字豊田に福琳寺在り是れ此太鼓の故地なるべし、左に堅田本福寺舊記及び太鼓銘文を記す。

二四二二　本福寺舊記

八幡御坊

江州

顯如尊師、蒲生郡安土ト云所ニ御建立、信長ノ寄連ニテ二町ニ三町ノ御境内ナリ、其後信長安土ノ民屋ヲ蒲生野ニ引移スベキ沙汰有之、御門徒コレヲ聞テ御坊ニ宜シカルベキ地ヲ豫メ見分シ、廣野ニ榜示ヲ立ツ、然リト雖モ地ヲ移サズシテ止ム、コノ

ユヘ蒲生野ニ地取リノ跡殘レリ、其後關白秀次公八幡山ニ城廓ヲ築クヘキ用意有テ、安土ノ民家ヲ八幡ニ引移サル、其節御坊ノ敷地ヲ安土ノ如ク六町ノ境内ヲ賜フ文祿元年壬辰也、其コロ御堂造營マシ〳〵、准如尊師供養ニ御下向ナリ、六町ノ内ハ寺内ト號シテ諸役御坊ヘ相勤ム、東照權現宮、關ケ原御陣勝利ヲ得玉ヒ、直ニ御上洛マシスマ、其節當御坊ニ貴轅ヲ停メ玉ヒ御一宿アリ、已後モ御坊ニ寄宿シ玉フ、關ケ原ヨリ彦根ノ域郭ニ越ヘ玉ヒ、彦根ヨリ八幡海道御上洛マシマス、吉兆ノ道ナリトテ勝道通ト云。

大猷院殿御上洛ノトキモ、此海道御通リマシマス、朝鮮人來朝ノ度毎ニコノ道往來ス。

當御門主寂如尊師御堂御再興。

元祿十三庚辰年九月十日慶讃大遶堂御執行也。

二四二二　太鼓銘

南瞻部州大日本國紀伊國池田庄福林寺

右當寺者後一條院御願寂尊上人草創也云々、正和五年成律院興南山宗磨三聚成珠傳三密教法者也。

于時永德二年壬戌正月十一日

當寺現住僧衆交名

住持　祐尊　覺運房

祐圓　印空房

祐賢　春仙房

賢意　行意房

尊口　道如房

賴祐　宗俊房

尊忍　珠賢房

太鼓偈

願諸賢聖　咸入道場

願諸惡趣　俱時離苦

光明眞言

（梵字三行）

隨求小咒

（梵字四行）

南無大般若波羅密多經

南無妙法蓮華經

南無金光明寐勝王經

妙憧菩薩　大金鼓

南無大放廣佛華嚴經

南無大方等大集經

南無大般涅槃經

南無阿含經

南無一代聖教

第二銘

奉張大鼓直參貫文

于時大永三癸亥年五月十四日

住持　澄巖大德井僧衆

淨秀房　淨慶房　淨至房　順識房　淨隆房　淨教房　淨宗房　行者上野　濟

戒善秀

春泉　春想　春識　了教　善嚴　泉教　□

想下部所

道□□□□　又五郎　孫六

孫二郎　彦三郎　松丸　小者　松若丸

小法師丸　千代丸

筆者淨隆（生歳廿四也）

第三銘

寶暦三年酉九月吉日　牛口張替

嶋之林村

太鼓屋　義兵衛（花押）

第四銘

元文五年卯月吉日

八幡　太鼓屋張替

儀兵衛（花押）

第五銘

延享三丙寅六月吉日

第六銘

大正三年十月

正福寺

大林增田七五郎

林義平 花押

正福寺は八幡町魚屋町に在り淨土宗なり、靈譽玉念を開山とす、玉念は上野新田の人永祿元年同國桐生に淨運寺を建て同八年新田郡小島に哀愍寺を建つ、後ち安土に來り信長に知られ天正四年五月一寺を本町に建て正福寺と號す、同七年安土宗論に玉念が日蓮宗と問答せしは有名なる所なり、十四年安土町の八幡山下に移さるゝ時當寺も今の地に移寺す、爾來寺地六畝四歩は長く除地として明治に至る、當寺隱居の庵室あり元祿十年代官曲淵市郎右衞門の時より其地貳段四畝歩を除地とす。

二四二三ノ一 本堂棟札銘

敬白江州蒲生下郡八幡山正福寺本堂再興之帖

竊以佛閣造立者佛法興之勝槩也、精舍修營者寶祚延長之良材也、正今其尋於濫觴者、印度餅沙王、施於迦蘭陀竹園、而學大乘金地、二十寺草創、震旦後漢明建立白馬寺、崇佛舍利、日域聖太子造立所々寺院、給三國共君子崇重万民尊敬之、自爾已來大小之寺坊未知其數矣、爰八幡町正福寺者、西方香室、本尊者春日作、末法有緣之願於無量壽佛之道場也、雖然、營作年久而堂舍漸損、修治晩成而棟梁欲傾焉、沙門某雖造營之巧頗無計略、未能再興矣、嗚呼積年之志、累日之願、雖爲切寧難成、于獨力、故偏賴他力、勸徴薄奉加、嗚硯染翰無貴賤、誘於遠近叩於柴門、以一紙半錢助成奉建立一宇草堂者也、乞願寸鐵尺木奉加輩、現者彌陀願海之智水、常洒于命葉而無委、當者合于起立塔像之金言而生九品上品花臺、仍正福寺建立之意趣如件。

于時慶安三甲寅暦六月吉日 勸進比丘贈上人神樂滿秀 大工八幡山大工町高木兵衞門同又十郎

奉加所正福寺諸檀那並八幡惣町中及近江村里別而野洲郡高木村付奥嶋三寶寺淨福庵諸檀那

二四二三ノ二 喚鐘銘

江州比牟禮山慈慧堂鐘銘

良金已設　由開而通　□製鳩工　大師本地
不侈不弇　悲體惟同　萬範乃銘　悲雷悲霆
乃鈦其韻　驚昏啓蒙　無遠不窮　閭戸艾苦
西聖一路　汗邪告豐　利樂何限　薄銘其功

寛政四年孟春　　觀鶩永忠原書

治工三條釜座和田信濃椽藤原國次
船木村寶城院廢堂際買得焉明治廿三年十月下浣
爲先祖菩提寄附西川庄六欽敬正福寺聰譽代

六如釋慈周撰

順應寺

順應寺は八幡町大工街に在り眞宗大谷派なり、寺傳に文暦年中大幟房了仙の草創にして多賀村に在り天台寺院たり七世明信の時本願寺蓮如の教義に歸依し大永元年改宗す其子從順石山戰爭に從軍して功あり天正八年五月教加の書を受く之を御杖の御書といふ云々とあり近江輿地誌略に「多賀村に道場あり其道場を天正年中八幡町今の地にうつす寛永十一年に始て順應寺と號す」といふもの當時移轉の歴史なるべし。

二四二三ノ三　鐘　銘

那物精神合金銅　通身張口說圓通　　院主比丘　俊　穎
十方檀信勝功德　出道闍梨一念中　　乾緣比丘　趣　道
加洲松壽林大乘見座日雲瑞叟撰　　江戸神田住
天明六丙午秋九月善法日　　鑄物師　垣失駿河
　　藤原春次

正榮寺は八幡町池田街に在り淨土宗なり天正中善譽祐存安土に一寺を創立し豐臣秀次の八幡山城に移るに及び當町に移轉せり、境内壹段拾壹歩は慶長撿地の時より除地たり。

妙法寺

妙法寺は八幡町の鐵砲街にあり黄檗宗なり、當寺古へは天台宗なりしに元龜の兵火に罹り爾後一小堂に本尊觀世音を安置せり、元祿中土田正崇寺にありし黄檗僧梅嶺の門下仙林來りて一庵を再興す、安政二年正月十五日失火に類燒し佛燈再び滅せんとす、明治元年僧悅傳四方に勸進し現在の堂宇を建立す本尊を護船觀音と稱す。

蓮照寺

蓮照寺は八幡町玉木街に在り大谷派本願寺の別院なり、當寺始め郡の莊邑（苗村大字莊）に在り慶長中八幡町に移す大谷派本願寺二世宣如の時なり、坂田郡世繼村淨念寺の了善主唱盡力する所なり寛永中攝津の僧道因なる者門跡の命を受けて監寺となる學德高く遠近來學の徒多し、道因弘敎の功多きを以て子孫相襲て監寺たるべきを命せらる、寛文四年幕府領の代官小堀仁右衛門本堂以下を再建し六月上棟四年を經て落成す、寶曆十年堂宇破損し時の住職藤倉圓成更に再建すこれ現在の堂なり。

二四二四　寺記

近江州蒲生郡八幡山蓮照寺者東本願寺之外院也、初在本郡莊邑、而不知何人之草創、經幾春秋矣、慶長中遷諸八幡山下、而後寛永中予四世祖釋道因奉本山命而監乎此寺矣、道因者族姓攝津人、知行兼備、敎戒尤至、故自四方來學者常多焉、以故本山洹泥、大上人賞其功德而許道因得法孫世々相襲監乎此寺焉、蓋今所存之堂宇則寛文中本郡之令小堀仁右衛門歸依、道因請朝廷而所造營者也云々。

二四二四ノ一　鐘銘

近江國蒲生郡八幡東御坊常住物也

當寺建立者　世次淨念寺　釋了善
當寺繁昌者　蓮照寺　釋道印
本堂再興者　同二代　釋廣誓
撞鐘成就者　同三代　釋知誓
右奉鑄志者十方三世一切衆生皆成佛道乃至爲法界平等利益也、仍以諸有檀那之

奉加合成就者也。

善住寺

善住寺は八幡町小幡街に在り眞宗木部綿織寺の支院なり、天正十四年僧秀證安土より移寺す依て秀證を中興とす、境内七畝廿壹歩は慶長撿地の時より除地なり。

二四二四ノ二　鐘　銘

南無阿彌陀佛

天明六年五月下旬建立

八幡山御堂法皇山無量壽院

善住寺什物

願主　寶輪坊巍舜

町内門徒講中

寶積寺

寶積寺は八幡町新街に在り淨土宗なり、當寺は始め安土山下に在り天台宗東南寺の末寺なりしに天正七年安土宗論の後ち淨土宗に改宗し同十四年現在の地に移寺す、當時の住僧を西覺祐といひ開山とす、境内七畝六歩は撿長撿地の時より除地たり。

二四二四ノ三　棟　札

現住頓蓮社相譽稱阿即至天龍大和尚

天下和順日月清明風雨以時災厲不起

（梵字）奉造營寶積寺本堂一宇　施主十方檀越

國豐民安兵戈無用崇德興仁務修禮讓

享保六辛丑年二月十五日　工匠　高木日向丞光蓮

願主　尾中權兵衛

二四二四ノ四　鐘　銘

貞享元甲子天十月十五日

江州蒲生郡八幡山寶積寺常什物

生蓮社見譽智圓和尚代

治工　六條若宮之住山田陸奥椽家長

歡譽淨喜信士　釋尼妙空信女　諦應定印信士

妙秋禪定尼

南無阿彌陀佛　願以此功德　平等施一切
同發菩提心　往生安樂國

蓮經寺

蓮經寺は八幡町孫平治街に在り日蓮宗なり、寺傳に當寺は始め佐々木定頼大檀那と爲り永正五年甲斐身延山久遠寺の日意を開基とし觀音寺城下に草創せし所、四個の支院あり堂宇善美を盡せりと見ゆ、永正五年は定頼未だ若年にして相國寺の徒弟たりし時代なれば父高頼なるべき歟、天正五年鹽商人小脇傳内安土城下に當寺を移し再建す、七年五月安土宗論の後一旦荒廢せしが十四年豊臣秀次八幡山城を築くに至り新町濱に地を與へられ安土に在る小堂を移す、金屋村西川茂右衛門等維持に勉む、寛永六年代官小堀權右衛門の時寺地を現地に移され本堂庫裡を建て寺觀大に加はる、後ち享保十一年再建すこれ現在の堂なり、境内四畝四歩は慶長七年撿地の時より除地なりき。

西方寺

西方寺は八幡町孫平治街に在り眞宗佛光寺派なり、寺記に當寺草創は推古天皇二十七年聖德太子の建立後嵯峨天皇の時勅願所となる、建長中諸國疫癘流行す比牟禮庄十三村の住民興正寺より惠心畫く所の彌陀如來の像十三幅を摸寫し現世利益和讃と共に與へられたれば八幡社前に會合し念佛會を行ふ、幾もなく疫癘止む云云と見ゆ、十三幅の彌陀像を念ずる疫癘祈禱は天正四年の回り念佛由來記には延德明應の時疫癘流行に始れるを記す、寺記の建長は延德の誤りなるべし、十三幅の彌陀像は各村に所持するを見るに何れも八光の彌陀にして佛光寺派の佛像なるを證す、永正の亂兵火に罹災し衰頽す、天正十四年豊臣秀次八幡山に築城あり十九年寺地を魚屋町に易へられしが元祿六年更に今の地に移る、佛光寺派江州第一の別院なり、寶永七年八月二十四日佛光寺門跡當寺に下向あり、正德三年本堂再建に着手し享保三年立柱すこれ現在の建物なり。

二四二四ノ五　鐘　銘

栗太郡高野庄辻村
冶工　太田西兵衛重次

願故寺

願故寺は八幡町博勞街に在り淨土宗なり、始め安土町に在りしが天正十四年住僧寛譽圭山寺を當地に移す、圭山は慶長十二年十日遷化す寺地貳畝四歩は慶長七年撿地の時より除地たり。

二四二四ノ六　鐘銘

寶暦三年九月鑄造

栗太郡辻村鑄物師

第二節　岡山村

西運寺

西運寺は岡山村大字小舟木に在り淨土宗なり、長祿三年の開基といふ七世の後日譽牛雄現在の地に移す日譽は隨流の嗣元和八年五月寂す、寶暦元年八世閑嶺の時雷火の災あり代々の重器燒失す、享和二年西岳圓隨現在の堂を建つ。

二四二四ノ七　本書裏書

西運寺惣旦那中

小船木村中奉加ヲ以テ奉表具建立者也

元祿四辛未年九月吉日

一和尚　庄右衛門

念佛講中

願成就寺

願成就寺は岡山村大字小舟木日杉山上に在り天台宗延暦寺正覺院末寺なり、寺傳に推古天皇二十七年聖德太子勅願により四十八ヶ寺を建立し最終に當寺を開基ありしにより願成就寺と號すと見ゆ、始め比牟禮山麓に在りしが天正十四年豐臣秀次八幡山築城の時日杉山に移寺せらる、比牟禮八幡神社附近に在りし時代の史料は延文元年東寺百合文書寶莊嚴院領三村庄島郷の代官願西の女の開申書中に成就寺と興隆寺の並列し、成就寺の東隣に代官願西の住せし宅あるを記す、即ち「成就寺興隆寺之僧等定俊語申了」「又」「彼執筆者願西之西に有る堂、件堂に千日籠有」「聖成就寺法印云々」此聖執筆也」

と見ゆ、成就寺は當寺の略稱にして興隆寺は大字多賀に現存す、後光嚴帝が京亂を武佐に避け轉して比牟禮山下の成就寺に入りて康安二年の新年を迎ひ給ひしは皇代略記に

康安元年十二月八日寅刻幸山門、同日遷御江州武佐行宮、同十八日遷幸同國成就寺、と見へて玉座の光榮たりしを傳ふるものなり（軍事志參照）永和二年十一月四日回祿の災あり寺寶什物灰燼するもの多し、大般若波羅密多經は幸に二百卷燒失して爾餘存す、左記同經奥書は之を立證す、卷十九奥書に成就寺西谷大敎坊卷四百四十九に成就寺於敎覺坊等見へて一山の塔中多かりしを知る、

二四二一五　大般若波羅密多經卷二百十四奥書

右當寺之藏經丙辰年十一月四日燒失仁悉令回祿畢、雖然大般若經四百餘卷火中殘給、住侶壞取之庚申年自正月下旬之比奉加修鋪、黃卷赤軸惣不全、寺僧老若合被再興、此中極樂坊之住持上野房全秀骨摧情屈而成大功、三春之永日者疎食而孤折料紙之槌、九夏之熱天者拭汗而自引橫竪墨、興隆之思通皮肉骨髓歟法誦常唏之、上古玄奘三藏之中興、全秀大德、下世時代雖異、志之至是同亦者再來歟期仁有不思議其時分極樂坊或夜四更之雖遇放火之難出來、則覺睡眠之床、東西馳走而忌火滅之術、未貶水火坑自然消滅此偏變成池也即知般海之浪、來消焰冥咸之至可仰可信而耳

康曆二年卯月六日　　佛子瀧尊

伽藍僧房五十餘棟を列ねたる寺觀も此時殆ど燒失す、元龜二年織田氏が延曆寺を燒失せしとき當寺にも災あらんを憂へし船木の小性等は佛像經卷を他に運びて萬一を警戒せり、左記大般若經奥書は當時の狀を語る、

卷第二百三十四

元龜二年九月十三日山門一亂之次手仁舟、木小性共取亂五卷失畢、內一卷者取物之內に在之、殘四卷書續畢、

干時元龜四年癸二月十五日、右筆、圓定坊乘忠、

即ち元龜の災は免れたり、天正十四年秀次の築城により日杉山上に移る、慶安元年護摩堂を建立すその勸進帖存す、寺領四至の古文書と共に幷記す、本尊十一面觀音及び地藏菩薩の二軀は明治四十二年九月國寶に列す、大正　年本堂を改築す所藏大般若經奥書を列記す

卷第三

文明五年癸巳卯月十二日　　右筆宗智

寺院由緒

爲現世安穩後世善處如形書寫了

筆者憲聡 敬白

卷第七

文明五年癸巳七月十八日

卷三十

以篠原之本被校之　仁安三年三月七日

難致丁寧校正之愚眼眩轉仕□有歟

卷第三十九

仁安三年三月七日ヨリ校之偏爲順次□

卷第五十

仁安三年三月七日

卷第五十一　口書

江州蒲生下郡成就寺

卷第六十

仁安三年三月始從七日依仰以篠原新源次之經校之

□廿九日德也

卷第百〇一

建久七年六月廿四日書寫了　執筆

交了无謬

卷第百〇八

建久七年七月五日於觀音寺御堂奉□

偏是爲法界衆生平等利益也執筆覺尊

右筆良祐

卷第百二十二

文明五年癸巳十二月日

處玲

卷第百二十四

當時永德改元三月日於圓滿寺書寫之

江州成就寺常住之本經

卷第百二十六

應永卅參年三月十八日　奉信讀所

卷第百三十一

康暦二年庚申三月十七日於大泉坊書寫了

祐賢

寺院由緒

卷第百五十七
康暦二年庚申三月十八日書寫了金剛佛子祐範

卷第百七十四
永正元年甲寅十一月卅日書之　右筆朝秀

卷第二百五十
康暦二年庚申三月廿九日於敎覺坊書寫了　金剛佛子宗乘

卷第二百五十二
成就寺　康暦二年四月十六日書寫畢　勢俊

卷第二百六十四
康暦二年四月十二日

卷第二百八十一
明德三年三月廿八日
于時永正元年甲子十一月日　玄榮書之

卷第二百八十八
十二行ヨリ前百三十行永正五戊辰十月廿一日賢意書之慈恩寺經師校進次時
盗取候之間交合是ヲ入書記

卷第三百〇二
永德元年三月二日　乘祐

卷第三百〇二
永德元年辛酉卯月十二日　乘祐

卷第三百〇四
永德元年五月十四日於光明寺書寫了　一藏房

卷第三百〇五
永德元年三月十四日　承證之

卷第三百〇六
成就寺　永德元年三月廿六日書寫了

卷第三百〇九
永德元年卯月二日書寫了　於光明寺

卷第三百十

永德元年三月十九日於光明寺書寫了

卷第三百二十

康曆三年三月三日　成就寺　承證之

卷第三百三十五

勢俊　越中

卷第三百三十八

永德元年三月廿八日阿彌陀寺北谷於心月房令書寫畢

卷第三百三十九

願以此功德普及於一切我等與衆生皆共成佛道

康曆參年辛酉二月廿五日　祐賢

卷第三百五十一

康曆參年辛酉三月廿三日　嚴海書寫畢

卷第三百五十二

康曆參年三月三日　嚴海之奉書寫　四十二歲

卷第三百五十三

康曆三年二月二十九日奉書寫　嚴海之

卷第三百五十四

永德元年三月十五日　嚴海奉書寫

卷第三百五十五

永德元年卯月二日奉書寫　嚴海之

卷第三百六十

永德元年辛酉六月十二日　嚴海之　四十二歲

卷第三百六十一

永德元曆沽洗上旬七日　處禪々師

卷第三百六十九

永德元年三月日　成就寺之常住見玉謹疏

卷第三百八十九

貞治二年十二月十五日書寫了

卷第三百九十一

江州蒲生郡於比牟禮山成就寺大智房書寫畢

於時永德二年九月廿一日　　右筆圓實坊乘忠

卷第四百〇一

比牟禮山成就寺本堂之常住也

南無大慈大悲觀世音菩薩奉書寫敬白

元龜二年正月十日　　圓滿寺執筆處益

去々年元龜二年山門一亂ノ次手ニ舟木ノ小性共□以勸進書續畢。

卷第四百二十

康暦二年二月廿九日於妙樂寺令書寫畢幸賢　　覺尊

卷第四百二十五

永德改元三月日　　西谷房圓林坊書寫之

卷第四百三十六

建久七年七月五日奉書寫之

卷第四百三十七

貞治二季極月廿五日

卷第四百四十六

去々年元龜二年山亂次手舟木小性共六卷取亂則以勸進書續畢右筆圓實坊乘忠

卷第四百九十二

于時應永二十九年六月廿二日　　右筆勢慶

卷第四百九十六

于時應永廿九年六月十日　書寫畢　　大智房金剛佛子乘惠

卷第五百二十

文明十七年乙巳閏三月八日令修覆畢願主乘惠法印

卷第五百二十六

康暦二年申四月二十八日於敎覺坊書寫畢　　金剛佛子宗乘

卷第五百三十一

康暦二年庚申五月三日損所書續了　　勝秀

願主權在廳勝秀

卷第五百三十六

康暦貳年五月十八日

寺院由緒

卷第五百三十九　願主勝秀

應安元年

卷第五百四十八　比牟禮山於成就寺本堂

卷第五百六十　右筆宗賢書寫畢

康曆二季庚申青楊彌生初五日

卷第五百七十四　佛子瀧尊

文明六年甲午正月十七日

卷第五百七十九

口二　禮社　朱印

卷第五百八十

比牟禮社　朱印

卷第五百九十八

近江國蒲生下郡比牟禮山於成就寺書寫了

國寶地藏菩薩

岡山村小船願就寺所處

二四二六　比牟禮山願成就寺護摩堂化緣疏並序、

願成就寺者、聖德太子挿艸之伽藍而壽棟朱甍、輪煥奐乎于江州二十四郡、蒲生之名區、本尊觀音大士之寶像、々中秘藏三寸十一面之金體、是則太子自所琢磨也、校太子傳、用

明天皇第一子、而母后夢、金色比丘、語曰有救世誓願々記胎内、我是救世菩薩也、云々、一超眞入、降誕放光太子之所創九伽藍、並諸州諸梵宮千佛萬菩一々不可勝論、誅戮守屋逆徒、賞祿河勝忠臣、救世菩薩、寧可狐疑、推古天皇己巳四十七齡而、

諸願成就、因建立願成就寺覆葺、[illegible]慶安戊子而一千三十稔、曰山比牟禮、或曰法華峰、時人喚曰八幡山、江東之一都也、而寺藏岩底、湖環、峯圍、江州盧山、山色清淨、溪聲長古、豫章鄉里夢、隨秋雁到東湖、蘇黃之舊題、念茲在茲、實一方勝槩也、八幡之爲靈、昭々混沌、末分之先、而赫々百億塵點劫之後、降誕神功皇后之玉殿、而鎭護我朝、朝鮮、新羅、百濟、無國而不歸掌握、神箭無敵、樗桑六十州、山河增光輝、草木知威名、現形字、佐垂迹、鴎嶺、武門之輩、懇禱、則威力自在、百戰百勝有感有應、如影隨形、侶月臨衆水、水無月之意、月無分照之心、妙驗大成、人皇六十六代一條院御宇、寬弘五影、比牟禮山、佛護神、々護佛、作主作賓、共操度生船、是以奉爲願成就叡之鎭守、相應和尙遙向比牟禮山、而造次禮之、顚沛拜之加之、仁平年中、蓮住上人親汲四明流、久臥叡壑雲、一朝遣遙牟比禮山、而匪翅入願成就寺之古道場、新築佛閣、安地藏菩薩之立像、大寶寺、滿願寺、扁護摩堂、號悉地堂、大日護國之獨鈷、年々抽一國豐饒之寸丹、如上縫綽載一卷緣起、凡閻浮界、一治一亂、々日已多、治日少、佛廬、神祠、羅欝、欣之變而、盡作烏有、蓋不知孰世孰年也、相公辱繼承文武、成囊弓之三代、而祭神祭佛、士農工商、唱唐虞封、比屋之淳風、幸際一天靜謐之嘉運、而十方諸檀越、不論識不識、徧呈短牘、隨家豐儉、而一紙不輕、萬錢不重、以志之侵、爲本、福無量、壽無量、一見卒都婆、永離三惡道、勝報況於護摩堂造立之助緣乎哉、疏曰

賀改元曆、　十日雨五日風、

記揷艸春、　五步樓十步閣、

安四海太平之枕、

懸一堂經營之牌、

觀音大士、　住圓通臺、

坐普門境、

上宮創建日本小補陀洛、　慈觀悲觀清淨觀、

八幡鎭護江左比牟禮山、　佛界魔界衆生界、

慶安元歲舍著雍困敦九月吉祥日、

願主大智坊榮賢、

二四二七　當寺文書

願成就寺山屋敷爲替之剋、日杉山南之境如在來候、今以無違亂候、寺之傍示之事、北者

限峯、西東者田地之路境、南者町之海道通り、諸公事免許之儀事如先規少も不可有相違者也、仍如件、

辰ノ九月廿五日　　大堀作右衛門　廣次（花押）

願成就寺惣中

二四二八　當寺文書

今日者參候處ニ御馳走過分ニ存候、然者日杉山堺之義、則西小兵衛殿へ申入候、峯ハ堀きり、中程ハ岩、ふもとハ寺さんまいの南之土井をかきり彌々相究申候、各々其沙汰口、爲其申入候恐惶謹言、

二月廿日　　木村善兵衛　重（花押）
井口太郎兵衛　武（花押）
中嶋太治右衛門　言（花押）

成就寺御年寄中參

嚴淨寺

嚴淨寺は岡山村大字船木に在り淨土宗なり、貞治三年泉譽西阿の開基する所、天正十四年寺堂を現地に造營す、延寶六年四月祭禮の宵宮に火を失し燒亡し元祿元年再建すこれ現在の本堂なり、

伴儀兵衛　重信（花押）

西願寺

西願寺は岡山村大字船木に在り淨土宗なり當寺は始め比牟禮山麓に在り万願寺と稱し天台宗の古刹なり今其古地に百躰地藏存す、戰國以後衰頽せしが天正十四年應譽玉念万願寺を此地に移し淨土宗の寺院とす、境内貳段貳畝九歩は慶長七年撿地の時より除地となれり、末寺二ケ寺あり、

長誓寺

長誓寺は岡山村大字船木に在り眞宗本派にして慶長十年の創立なり、當寺は元と沖島に在り今其遺跡を長誓寺山といふ、移寺の時島民移住す西井中島喜多奥村等を姓とし船株を所持せし者は舟運を業とす、或時林村（宇津呂村大字大林）の革工等罪あり四戸の者死刑に處せられんとす、當寺の住僧奔走して官に請ひ赦免を得たり其恩に酬ゆる爲め今に至るも太鼓破損の時は同部落より修繕する例あり、

祐嚴庵

祐嚴庵は岡山村大字船木に在り淨土宗なり、應永年中玉映祐嚴尼開基す依て庵號とす、境内壹畝十四歩は慶長以後除地たり安永四年再建す。

眞念寺

眞念寺は岡山村大字南津田に在り眞宗大谷派なり、始め村人等本願寺蓮如に法を聞き淨土眞宗の教義に歸依し相謀りて一道場を建て小林又左衛門（法名長春）道場を守る、三

男一女あり嫡子又左衛門天文元年八月法華宗徒が山科本願寺を攻めし時本願寺の爲に從軍して戰死す、二男又二郎は堅田に殺され三男慶正（又三郎）道場を守る、慶正一女あり村人道順の子慶春（市左衛門）を養ひ嗣とす、慶春天正十五年卒し其子又十郎慶善に至り教如に歸依し大谷派に屬し一寺を建立し眞念寺と號す、教如爲に自筆淨土論を與ふ、蓋し是より先き織田信長と本願寺と對抗せしとき慶善從軍す、雜刀馬具等現存す、慶長七年撿地の時寺地一反四畝六歩は除地となれり、それより慶良慶悅を經て慶應の時享保九年六月十一日夜村人失火の餘炎に罹り堂宇類燒す、同十三年二月再建に着手し翌年冬功を竣り十五年二月遷佛式を行ふ、本尊阿彌陀如來は元と船木西願寺の佛像なりしが寛文二年夢想により當寺に安置せりと傳ふ。

順念寺

順念寺は岡山村大字南津田に在り眞宗大谷派なり、當寺は古來天台宗なりしに清水太郎兵衛なる者親鸞に歸依し名を眞空と賜ふ爾後眞宗に轉じたり、天正中信長顯如を石山本願寺に攻めし時兵糧武器等を津田の濱より舟運せしが時の住僧空圓は十七人の部下と協力し信長の舟奉行を水中に投じ兵糧武器を大坂に送れり、故に暫く

彼地に留り平和後歸村して十七人と協力して再興す故に空圓を中興とす、慶長五年教如馬淵の圓願寺に滯留せし時同寺の僧教順を伴ひ當寺に來り滯在したり依て後に大谷派に附屬せり。

淨國寺

淨國寺は岡山村大字牧に在り日蓮宗なり、日像の開基と傳ふれば古き寺ならん、明治十一年八月一日回祿の災あり古書記錄悉く燒失すれば來由を知るべきなし。

乘蓮寺

乘蓮寺は岡山村大字牧に在り天台宗眞盛派なり開基年月詳ならず、僧圓澄の時衰頽を中興す圓澄は天和三年三月卒したり、明和二年曉道の時梵鐘を鑄造す、

二四二九　鐘銘

大扶桑國東山道、淡海州蒲生郡、牧村盛光山乘蓮寺現住沙門曉道、新造洪鐘、警策晨昏、懸諸簨簴處以高樓、檀信輻輳、島民告成、慈來請余銘、式傳萬古、乃勸銘曰

盛光山巔　寺號乘蓮　鯨鐘高懸　響徹九淵
減格諸天　救濟黃泉　同通妙詮　聞消罪愆
離有爲纏　賞無明眠　法身常然　般若光鮮
解脫有緣　棹度筌船　福利無邊　普及大千
法運綿延　億萬斯年

維時明和貳年龍集乙酉三月
西教二十二世兼法勝寺賜紫沙門眞如撰
江州栗太郡辻村冶工太田角兵衛種重

願誓寺

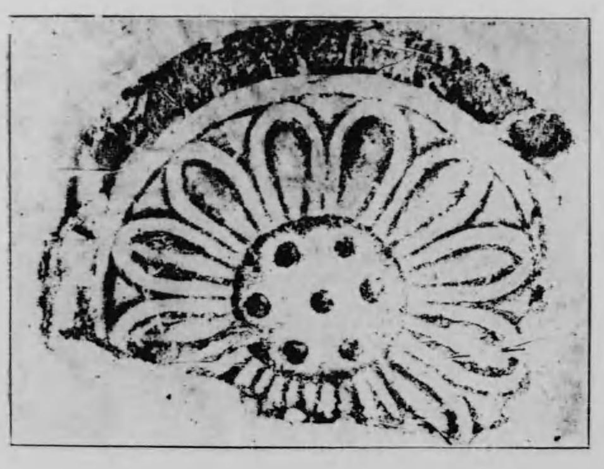
願誓寺は岡山村大字牧に在り淨土宗鎮西派なり、永正年中映譽宗珍の開基する所なり、始め九里氏の菩提寺たりしが九里氏の滅亡後今の地に移る、文政年間領主松平內匠頭が陣屋を此地に設けし以來當寺を菩提寺とし崇敬厚し、現在の本堂は文政二年の建立なり。

願福寺は岡山村大字加茂に在り天台宗なり、當寺は天正年中僧行基の開基せし古刹なりといふ、古へは元福寺と記す大字加茂九區の内寺内と稱する一區あり、寺内は即ち元福寺の境内なり以て其盛時は僧坊甍を並べし巨刹たるを知るべし、土中より布目瓦を發見す優秀なる瓦當は奈良朝期の製作なるべし、史料の存するものなしと雖も一片の瓦當能く千古を語り行基が開基せしとの寺傳も時代に於ては大差なきが如し、長命寺文書中に當寺に係る史料三通あり文永三年十二月を最古とす、其他應安元年加茂の人次郎太夫なるもの丶田地の賣券にして船木郷内元福寺御領と記す、船木郷加茂庄なるは莊園志加茂社領の條に說けり、今一は應永廿五年重覺なる僧の田券にして又元福寺御領内と記す、此二通により元福寺と記せしこと幷に其の御領内とありて尋常の小寺院に非す權威ある巨刹たりしを知るべきなり、戰國時代兵燹に罹り漸く衰頽したり、本尊藥師如來は明治四十二年九月國寶に列す。

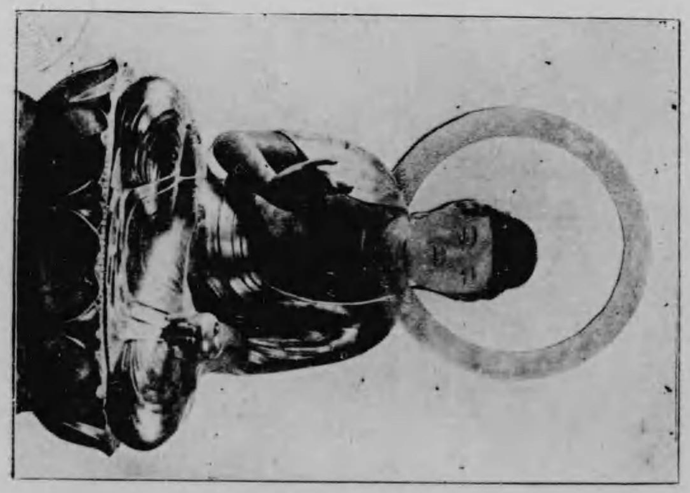
二四三〇　島村長命寺文書

長今須畠事、數百歲以來爲寺領、勤常燈之條、於爲欠事者、今更不可及勸落御沙汰之由、內御氣色候也、可致存知之由如件。

文永三年十二月十八日



當瓦古掘發此寺



寶國、來如師藥

岡山村加茂願福寺所藏

元福寺沙汰人

（端書）

石泉院之御房御教書

元福寺預所狀

二四三一　同寺文書

謹辭沽却進、先祖相傳私領田地新放券文事。

合壹段小參拾步者。

在蒲生下郡船木郷元福寺御領内

十三條十九里十二坪大卅步　十四條十六里十四坪。

兩所已上段卅、

右件田地、元者次太郎相傳之私領也、然而依有要用、直錢玖貫文仁限永代松鶴仁所沽却進實正也、相副本證文壹通候畢、將又、一所ハ依有類地本證文之裏破候上者、雖經後々代々更以不可有他妨、若萬之一、雖有公家、武家、御德政之新法、於彼田地者、不可申一言子細、猶以違亂煩出來之時者、本直物仁加伍倍之利分可辨返進者也、仍爲向後龜鏡

阿彌陀如來、國寶

岡山村加茂生蓮寺所藏

寺院由緒

新放券文之狀如件。

應安元年戊申十月十七日

（端書）

賣主　次郎太夫（花押）

かもの次郎太夫うりけん

二四三二　同寺文書

賣渡進、先祖相傳私領田地新放券文事

合壹段者　字上山河仁在之只田畠也、

在蒲生下郡元福寺御領内

十四條十六里廿三坪西繩本ミソノ東ソヱ仁在之

右件田地、元者重覺之相傳私領也、雖然依有要用代錢肆貫伍佰文仁、源六仁限永代所沽却進在地明白也、雖須相副本證文依有類地うらきわる上者、あいそゑす候、於此下地者達目之時者、本直錢加伍把之利分可請返進者也、仍爲向後龜鏡之、新放券文之狀如件、

應永廿五年戊戌十二月十二日　重覺（花押）

生蓮寺

生蓮寺は岡山村大字加茂に在り天台宗眞盛派なり、寺傳に此地は眞盛上人巡錫の故地なり始め現寺より三町餘を隔てゝ竹林寺あり古き大刹なりしが元龜の兵燹に囘祿し本尊阿彌陀如來は里人の出す所となり無事なりき、後ち今の地に小堂を建て其佛像を安置し眞盛上人の緣故により坂本西教寺の貫主を迎へて供養したり、貫主は九品山生蓮寺の號を賜ひ以後長く其末寺となれりと、本尊阿彌陀如來は明治四十二年九月國寶に指定せらる。

信行寺

信行寺は岡山村大字加茂に在り眞宗佛光寺派なり、寛永年中東中小路の人稻田善西なる者遁世して佛道に歸し小堂を營みしに里人競ひ援助し遂に大成して一寺となり佛光寺派に歸し後ち木佛寺號を許されたり、

淨寶寺

淨寶寺は岡山村大字加茂に在り眞宗木部派なり、開基年月詳ならず、寶永六年住職榮隆の時親鸞上人眞向の像を許され享保元年聖德太子及び七高僧の眞影安置を許されたり、現在の本堂は榮隆の時建立せし所なり、

圓宗寺

圓宗寺は岡山村大字加茂に在り眞宗本派なり、草創年代詳ならず親鸞上人上宮太子七高僧等の影像下附は享保廿年三月下旬と見ゆ。

稱念寺

稱念寺は岡山村大字田中江に在り眞宗本派なり、永正十四年の創立なりと傳ふ、佛像裏書を按するに蓮如上人影像裏書に延寶元暦癸丑霜月五日とあるを最古とし太子七高像の裏書は同二年正月廿一日とあり、親鸞聖人と良如の畫像には正德元暦辛卯五月八日とあり、梵鐘は明和九年喚鐘は享保二年の銘あり銘文左記す、

二四三三　洪鐘銘

法器之德　古今赫然　和心播響　應乎成緣

獄火長滅　劔輪已鐲　鹿幾累刼　利物无邊

時明和九壬辰暦春三月日

近江國蒲生郡田中江村獅々吼山稱念寺現住　釋一專　南汗謹識

治工栗太郡辻村鑄物師　八幡多賀村　國松伊兵衛重貞

二四三四　喚鐘銘

享保二丁酉年三月三日

再鑄天明三癸卯年願主長崎塩谷住善西、妙順、順誓、妙誓、

善性寺

善性寺は岡山村大字田中江に在り眞宗本派なり天正九年十月の開基なりと傳ふ、佛像裏書を按するに太子七高僧は寶永二年七月親鸞聖人及び良如の裏書は同四年八月とあり、喚鐘は寶暦十年十一月治工京都三條釜座和田信濃大椽とあり、梵鐘は寛永二十一年長門國にて鑄造せしものを明治十一年十二月寺僧十林欣淨買得寄附せし

ものなり、其銘に曰く

寛永二十一年秋、鍛冶工長門府中南金屋藤原朝臣安尾彦左衛門尉正次

稱名寺

稱名寺は岡山村大字田中江に在り眞宗本派なり永正九年の開基と傳ふ、佛像裏書を按するに太子七高僧及び親鸞聖人畫像は共に享保二十年三月と見ゆ、喚鐘には「明和五年四月京都鱗形屋喜太郎朝貞寄附爲淨暉院長光元久居士菩提」と銘す、一切經貳千五百卷あり同人の寄附せし所なり、奥書に天正二年孟秋稔五日と記す。

定林寺　稱藥師堂

定林寺は岡山村大字田中江に在り天台宗の巨刹なり、大字田中江は古への十林寺村、田中江村の合併の稱なり、この十林寺は即ち古へ定林寺の轉訛なり、定林寺は粟田青蓮院文書康平六年五月二十日に所注する妙香院庄園目錄中別院の部に「定林寺在蒲生下郡」と見ゆ、康平は後冷泉天皇の御代にして大正十年を去る八百五十八年前なり、其時延暦寺の別院とあれば隆盛なる天台寺院たるを知るべし、其廢亡の年月詳なら

藥師如來、國寶

岡山村田中江藥師堂所藏

ず、明應五年若くは元龜二年の兵火なるべし、今藥師堂蓮池等存す、近江輿地誌略には大日堂とし左の記事あり、

大日堂　田中江村に在り何れの作と云ふことを不知、傍に觀月ト西居士月山妙印大姉と云ふものゝ九重の石塔あり、當堂の開基田中氏のものゝ墓なり、此大日堂屋敷の界内貳段四面なり、

蓮池則大日堂屋敷の界内にあり四間四方許あり池中悉紅蓮なり、此中一莖に二花及三花生ずるものあり甚奇なり云々、

と記す大日堂といひ藥師堂といふもの何れも定林寺の古佛を安置する小堂なり、藥師堂の藥師如來座像は明治四十二年九月國寶に指定せらる、按ずるに定林寺の本尊なるべし、

二四三四ノ一　鰐口銘文

弘化三丙午三月造之

十林寺藥師堂什物

同村　教順　寄附

二四三四ノ二　同上

寺院由緒

明治九丙子卯月日　　樹林寺藥師堂什物

願主　小川伊三郎
上ノ切　川村善五郎

第三節　桐原村

興願寺

興願寺は桐原村大字中小森に在り桐原山と號す天台宗眞盛派なり、草創の年代詳ならず天文七年僧眞海中興して法燈を掲ぐ、元祿十年二月の書上に寺地四反九畝九歩は慶長七年撿地の時より除地なりしを記す、寶暦三年住僧實玄の時洪鐘を鑄造す、半鐘は元祿九年金口は享保四年個人の寄進する所なり、各銘文左の如し、

二四三五　梵鐘銘

近江州蒲生郡桐原村天德山興願寺鐘銘幷序、

鐘磬之功利感徵布在經傳命不敢喋、其用眞非爲晨昏報時而已、苟槌立以法而慈心突存利時々數脫幽危其益固不可測、施貲造之者其福亦博大哉、興願寺未詳開創之人、天文中開眞海法師中興之後永屬本山之子院於今二百餘年相繼淨業之靈區也、然殿堂僧舍幡蓋莊嚴之具舊皆備足、但無鐘聲以警晨昏者、今之寺主實玄謂、梵鐘者救苦頂道之要器、寺院之不可以一日無者也、因怪募檀資、命冶工鑄銅鐘一口、既就請予爲之銘雖予嘗許諾事繰紛擾而久不果、頃連請而不止、遂弗嘶大方之哂、爲之曰　興願蘭若　神器鼎成　鳧氏所治

當寺代々

慶雲院百歳夷濟居士　　有縁無縁法界
寶樹院泰樂妙亮大姉　　西屋淨貞信士
光林院徹心慈明居士　　西月理清信女
玉操院寂淨凉光大姉　　迎月宗尒信士
篤信院淳譽元達居士　　秋月妙光信女
珠光院松譽壽元大姉　　樂邦宗見信士
容膝軒清岳宗照居士　　空岸榮觀信女
坤性院元廓壽貞大姉　　一等全心信士

富奏軒宗元元宣居士　　單月良念信士
芳操院梅譽清順大姉　　寒月妙喜信女
泰祥院儀岳宗忠居士　　圓廓壽輪信士
理明院圓譽知亮大姉　　爲兩親菩提
善光院月凛宗德居士　　圓譽淨欣信士
貞德院光山常然居士　　妙蓮信女
浴霜道紅居士　　實相昏善信士
頋譽警隨居士　　觀山理法信女
圓譽道休信士
光譽妙誓信女

爲三界萬靈　　三界萬靈

檀信福營　　簨在殿庭　且暮鏗鏗　震山響湖　魔去鬼驚　幽感賢聖　顯警蕙生
宏平斯物　一擊遙亨　嚮存慈心　孝以偕稽　長時無闕　法令之正　鐘益淨業
千秋旃盛
時寶曆第三歳次癸酉晩春中院

西教兼法勝住持賜紫沙門眞證謹撰

興願十二世　　蘭州實玄代

同國栗太郡高野庄辻村
太田西兵衛重次

時之世話人

理左衛門　喜兵衛　佐右衛門　清七　杢左衛門
助左衛門　小右衛門　五郎右衛門　五左衛門　彌兵衛
又右衛門　孫三郎　八幡町權左衛門

二四三六半鑑銘

興願寺住物見岸和上代
元祿九丙子天
冶工洛陽釜座住近藤丹波椽
江州蒲生郡桐原中小森村池田伊右衛門
西月宗貞居士　　春屋妙長大姉

榮室宗甫居士　　寶光壽慶大姉

二四三七　金口銘

觀岳了心居士　　大法師實傳　　施主中小森村中川氏定八

享保四己亥年七月吉祥日

冶工辻村太田西兵衛重次

覺永寺

覺永寺は桐原村大字中小森の赤尾に在り眞宗本派なり、永正七年十二月僧了西の開基なり、了西の祖は大原左近と稱し多賀神社の神官なりしが深く眞宗の教義に歸依し神官を罷めて農となりしに了西に至り一宇を建立し桐原安川(總道場と稱す、後に覺永寺の號を許さる、當寺に弘安四年八月鑄造の古鐘を藏す、此鐘は始め坂田郡番場息郷村大字番場正福寺にて鑄造されしに明德二年正妙禪門なるものにより本郡苗村神社に寄進され、爾來同社に傳はりしに明治の初め神佛別離令出て洪鐘は佛家の器なりとて賣却し當寺に買得する所となれり、故に鐘銘に三期の文を刻す左の如し。

二四三八　梵鐘銘

諸行無常、是生滅法、
生滅々已、寂滅爲樂、
敬白
奉鑄三尺鐘一口、
右日本國、近江國坂田南郡、箕浦御庄、馬場正福寺鐘也、若於此鐘盜取輩者、受重罪身、來世者爲三惡道住、一門無永出期
弘安二二年辛巳九月十七日庚申奉懸之

願主　沙彌道佛
比丘尼道信

同　第二銘

奉懸稚鐘之事、
右蒲生之郡苗村三所大明神
御寶前花鯨也、
明德二年辛未六月一日

檀那正妙禪門敬

願主　沙門　矜永白

同　第三銘

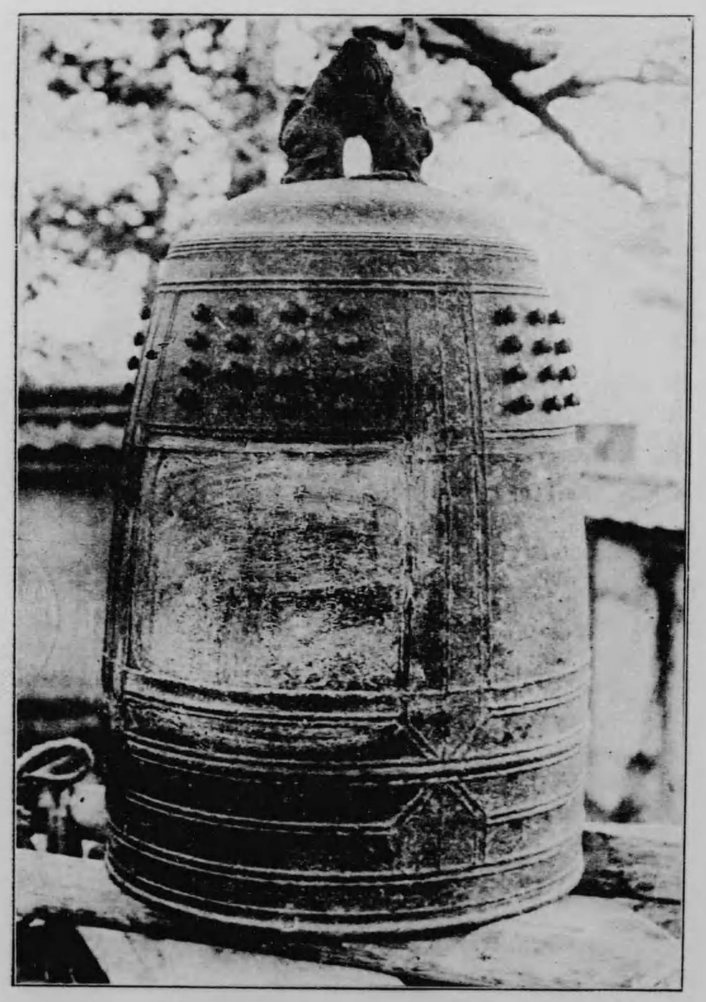
今也　皇政維新、官欲別神佛而禁於混淆也、梵鐘之在祠者、悉廢故不用多、寺主覺因師愛募檀越喜捨淨財者若干人、師之得此鐘也可想宿因矣、豈不亦淨業勤修之力師來索余銘、乃爲之銘、銘曰、

豪壯示元氣、　律呂是和平、
一撞震天地、　豈待百八聲、
切佛無邊際、　普化度人天、
汪運永增輝、　福祚長經延、

明治三庚午九月　伏水得聞撰

近江國蒲生郡中小森村
赤尾山覺永寺十世現住　覺因
募緣發　赤尾五作
願主　惣門徒中

弘安四年鑄造の古鐘



綱原村中小森覺永寺所藏

德行寺

德行寺は桐原村大字池田に在り三光山と號す眞宗大谷派なり、寛文二年三月釋雲光の開基本尊阿彌陀如來は佛師宗重の作なり、天明元年十月十四日回祿の災あり同四年二月再建計畫し八年五月釿始めを爲し寛政十年九月に至り落成す大工は須惠村、荒田李右衞門鵜川村西村松兵衞二人棟梁たり、洪鐘は文化十二年播磨姫路にて鑄造されしを明治十二年村人淺野安平買來りて寄進す、

二四三九　鐘銘

笘編村　木村與宗寺　圓明

文化十二年乙亥十二月

勅許鑄物師播洲飾東郡姫路住統領職

芥田五郎衛門源宗功

明治十二年卯十二月蒲生郡池田村淺野安平當村德行寺寄納之

地福寺

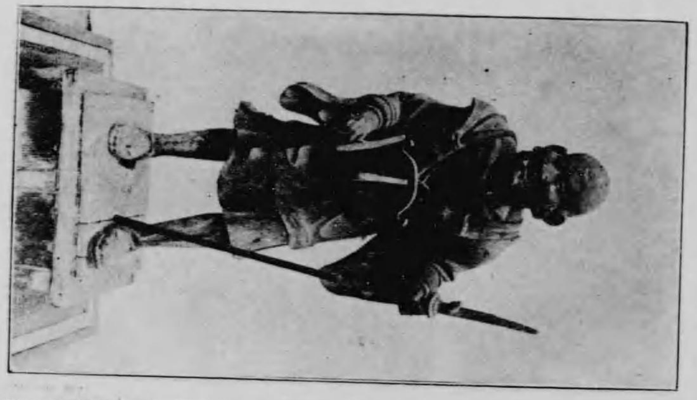
地福寺は桐原村大字池田に在り天台宗にして本尊藥師如來なり、寺傳に當寺は傳教大師巡錫の時衆生濟度の爲め藥師佛を彫刻し安置ありし古地なりといふ、正德年中僧應盛中興して法燈を掲げたり。

莊嚴寺

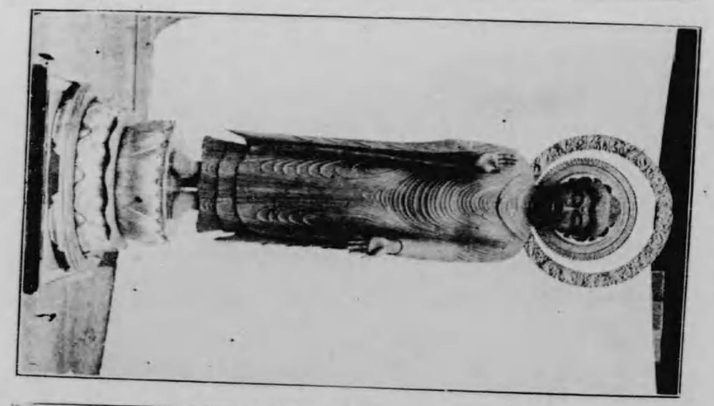
莊嚴寺は桐原村大字安養寺に在り淨土宗なり、寺傳に當寺は始め安養寺と稱し天台宗の巨刹なりしが元龜二年信長の兵火に燒失したり、其後慶長九年朝譽一宇を建て阿彌陀如來を安置し莊嚴寺と號し淨土宗に改めたり、安永中僧興譽法燈を掲げしに天明年中火災に罹り燒亡す、現在の堂は明治四十四年の建立なり、境内に釋迦堂在り釋迦如來空也上人の立像聖觀世音の座像とを安置す、釋迦如來と聖觀音の二像は明治四十四年八月國寶に指定せられ空也上人の像は大正二年四月國寶に指定せらる何れも安養寺の遺物なり、洪鐘は正保二年九月上野神社の神鐘として鑄造せし所明治以後當寺に移る其鐘銘及び棟札銘文左の如し。

二四四〇　鐘銘

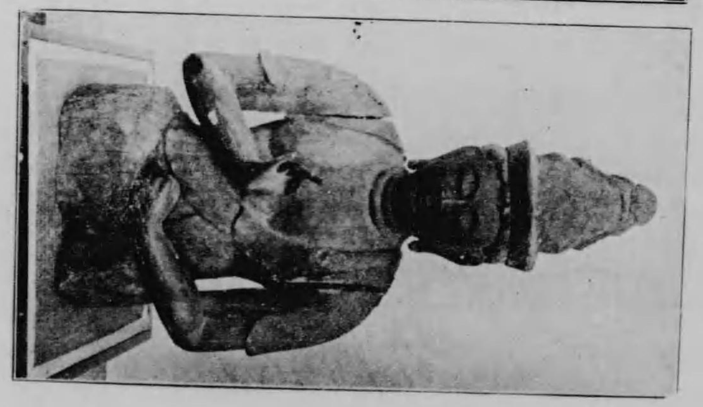
奉鑄造洪鐘一口



寶國、像人上也空



寶國、來如迦釋



寶國、音觀聖

藏所寺嚴莊寺養安村原桐

近江國蒲生郡桐原郷、是午頭
天王鎮座之勝地、於越下邑檀越爲貴當社
之靈德新華鯨掛寶樓焉。
抑梵鐘者鎮護國家之器淨場莊嚴之具也、漢高祖收鐘於金樓示玉千秋之樂、唐季王聞
鐘於陰獄息縲械五木苦、矧亦禮奠告時祭場催人非鐘何有其德不可勝計、仰冀靈神擁
護龍天證明、國土平均、社頭安穩、音響音震遠近利物及朝野而已。
正保二年龍集乙酉九月吉日
成就院法印盛秀
願主　延壽房僧都秀圓
施主　桐原郷氏子等
右工　同國栗本郡
高野郷辻村住
二四四一　棟札銘一

十五世岡山祐譽　　棟梁　高木作右衛門

寺院由緒

奉建立本堂改築天龍八部守護寶牘

明治四十四年五月廿日　世話人

小林寅吉　山本滾藏　松浦政吉
松浦佐吉　山本亀一郎　小林與藏
三上彌七　大林長次　三上與藏

二四四二　鐘堂棟札

天下和順日月清明風雨以時

奉建立梵鐘堂天龍八部守護寶牘

災厲不起國豊民安兵戈無用

明治廿五年十一月吉日　十五世岡山祐譽

發起人

松浦嘉兵衛　小林寅吉
山本善藏　松浦亀吉
三上彌七

光照寺

光照寺は桐原村大字森尻に在り天宗宗眞盛派なり、寺の由緒詳ならずと雖も本尊藥師如來坐像は明治四十五年二月國寶に列せらる。

第四節　宇津呂村

正宗寺

藥師如來、國寶

桐原村森尻光照寺所所藏

正宗宗は正宗壽國禪寺と號し宇津呂村大字土田に在り黄檗宗なり、當寺は始め一地藏堂に過きざりしが延寶六年十一月八幡町の西川義祐伴是閑（庄右衛門）伴紹雲（傳兵衛）及其他の信徒等一宇を創立し大眉禪師の高門梅嶺雪禪師を迎へて留杖せしむ、大眉は隱元禪師の高弟にして黄檗宗の明星なり、梅嶺同七年四月普山し先師大眉を當寺の開山始祖とす、是より先き日野正明寺は龍溪禪師によりて夙に檗禪の旗幟高く輝き爾後晦翁等其門流を酌みて黄檗宗の寺院日野附近に興隆せり、偶々大眉の門より出てし梅嶺來りて八幡町に隣る地に旗幟を立て翌年更に岩藏の福壽寺を中興す、蓋し是より先き梅嶺は延寶二年神崎に正瑞寺を開きたれは西川氏伴氏等の歸依せしは正瑞寺時代に端を啓きし所なるべし、延寶七年梅嶺先師大眉の爪髮塔を正宗寺に建て性澂に塔文を撰せしむ、元祿八年伴氏西川氏等同志相謀り華鯨を鑄造す梅嶺乃ち銘文を撰す翌九年幕府領の代官曲淵市良右衛門は境内四段歩を免除地とし寺基愈々固く遂に同宗中本寺の格に列す、寺寶に後水尾上皇の御畫像あり皇女林丘寺宮元瑤尼公贊歌を題せらる、又上皇の皇子眞敬法親王の額幷に賀偈、又元瑤尼公より梅嶺に賜はりし綱代の乘物、大明國金谿王の揮ひし法苑流珠の額等あり、梅嶺が入寺の偈は其語錄中に見へ、塔銘は東林和尚夢語中に見ゆ、皆左記す。

二四四三　梅嶺語錄

延寶六年戊午冬、近江州蒲生郡法王山正宗禪寺締搆殆成、珠岳二徒僧同乘檀越請師住持、師於己未年四月初三日入寺。

據座、横柱杖于膝上云、入深山擒虎兕、獵人之勇也、跨渤海斬鮫龍、漁父之勇也、且作麽生是衲僧之勇、果有其人、請出與山僧柱杖子相見、良久卓一下云、雖然如是盡法盡法無民。且放過一着。

小參、舉癡絕冲和尚、遷天童兼住育王上堂云、天童用底、來育王用不着、育王用底、來天童用不着、雖然如是、用不着處用有餘、一箭雙鵰隨手落、山僧又且不然、鳳翔用底、來法王用得快、法王用底、來鳳翔用得快、然雖如是、用得快處用無餘、何也、大海若知足、百川須倒流。

當寺奉先師大眉善老和尚爲開山始祖、新建髮塔小參云、天開地闢坐當軒、寶塔巍然鎮鹿園、無影林中花萬點、枝々葉々蔭兒孫、恭惟、先師眉老和尚、兩邦扶法、一代稱尊、道豐德備、充塞乾坤、正令全提、不滯枝葉、拳踢相酬也、深結讐寃、便見法王山中、大地爲席、無縫塔前、虛空是門、直得龍吟虎嘯、雷激電奔、台山雲起、湖水波翻、只如回機就位、飲水諳源、一句作麽生道、將此深心奉塵刹、是則名爲報師恩、

二四四四　同　上

再住法王山正宗禪寺語錄

普請小參、問木平和尚、凡有新到僧、未許參禮、先令運土三擔、還有爲人處也無、師云、高々處仰之不足、進云、和尚令衆拽石般土、爭奈有人不肯、師云、低々處平之有餘、乃擧白雲和尚云、若端的得一回汗出來、便向一莖草上、現瓊樓玉殿、若未端的得一回汗出來、縱有瓊樓玉殿、却被一莖草蓋、作麽生得汗出去、自有一双窮相手、不曾容易舞三臺、師云、入理深談、則不無白雲、爭奈只要逆風把挹、不解順水行船、山僧即不然、若端的得一回汗出來、須是向一毫頭現寶王刹、若未端的得一回汗出來、何妨坐微塵裏轉大法輪、汗出與不出且置、畢竟作麽生、卓杖一下云、見義不爲無勇也。

移新方丈示衆擧、潙山和尚頌云、潙山方丈峭峻難、上若人蹋着、氣如焚將、雲峯悅禪師云、作家宗師、天然有在、僧云、和尚作麽生、悅有頌示之云、翠岩方丈、曾無遮障、衲子入來、便見和尚、師拈云、一人如獅弄兒、一人似婆愛孫、雖然如是、若欲令人得入堂奧、猶未稱好手、山僧亦有一頌、法王方丈、八面明亮、應接群機、有收有放。

二四四五　爪髮塔銘

近江州蒲生郡法王山正宗禪寺開山大眉善大和尚爪髮塔銘

原夫大丈夫處世、自當做出大丈夫事、明卓絕照映今古、寧冥徒架于空言、貽譏識者、所以

云、與其架之空言、孰若觀之行事、蓋言易而行之難也、其不架之空言而能倚實行事者、非師也邪、師諱性善、字良者、其號曰大眉、生泉州晉江許氏、父瑞宇家甚殷、嘗爲豪右所侵、乃變名逸去、遂殖于外、師獨與母李氏而居、事母甚謹、及母喪隨舅氏、遷玉融、覺人心梟險世相滄桑、輒長齋奉佛、與龍田良冶樂和尚締方外交、預佛會、知有宗門中事、一日拊髀嘆曰、大丈夫當翺翔大方、求出世法、安可營々作甕裏醯雞、邪遂參開山隱老人于獅子岩、時年十有七矣、老人見師眉宇甚器許、先是老人有柱杖、墜岩下、覓之烏有、及師登山偶拾之、持上老人、老人陰自喜曰、他日能助吾一臂之力、必此兒也、尋爲師落髮、自是岩中所有重務人所不能爲者、師皆任之無難色、逮老人住持黃檗、攜師與俱、値重興祖席、紛然百爲、食指浩繁、師持疏走潮陽、徧募檀信、不問寒暄、每歲納疏金帛、雲委而寺務竟成、常充監寺之職、一衆賴之、殆不減岐老之輔慈明也、以故四方黑白男女莫不以菩薩稱之、潮有王氏道人、信師甚篤、嘗以鳳栖挽師爲主、師不受、令請龍華無得寧和尚、王益重之、計師在黃檗廿有餘稔、其奔勞于外者居多、未嘗安也、況當乾坤鼎革之秋、而干戈徧野、師孤身隻影出入于烽煙之中、不懼生死、非忘軀爲法能若是乎、甲午夏扶老人應聘東來、三遷法社、皆任綱維之職、整理禪規、辛丑夏老人承 上將軍賜地大和、新開黃檗、以師善區畫經理、特擢爲都寺、督造梵宇、咄嗟之間而規制奏成、既而自念人命風燭、四大衰頹、乃覓寺之東徧極深邃處、縛茅以修禪寂、榜曰東林、一夜定去、至中宵、豁然證入信口說偈曰、中秋月上夜沈沈、一般靈光亘古今、無角石牛鼻孔露、從茲更不別追尋、乃癸卯秋八月也、是年冬老人開山已定、開爐結制立兩堂、舉師爲第二座、師力辭、至乙巳秋、承老人記、剪自時厥後師念大法鼎重、益自韜晦、槁頂黃馘、茹苦食淡、綽有古老之風、有山居詩若干首、句句皆胸中流出、足以傳誦云、癸丑春老人示疾、師晝夜執侍不離左右、及老人入般涅槃、師伴龕百日、衣不解帶、食不下咽、每舉首瞻像、輒悲淚滿目、蓋師與老人始末四十餘載、其師資恩誼有不可解于衷者、自是師亦厭世矣、即于是秋九月示微疾、囑後事、一日與衆茶話、次預命、激乘莒激以師爲戲言、但微咳而已、不期一旦書頌坐化、實延寶元年十月十八日午時也、先是師在病中自知不起、以開山老人所付源流衣拂、付梅嶺雪公禪師、復授以偈曰、曹谿正脈流今古、接續須還越格人、歷盡雪霜堅素志、一枝梅發嶺南春、師自得法、晦跡九霜、未易許人、至臨末獨委于雪公者、以其久參知識、操履誠實、足以寄命也、又將東林捨與寶藏鐵眼禪師、以貯大藏之版、蓋此地高廣林木陰森、可以避水火之患、於是四衆咸識師心度越于人也遠矣、又誡弟子不許留遺骸、免費世間財、免占常住地、是亦有所感激以示于人者也、乃自作擂骨偈、有水晶宮殿琉璃界、任我消搖趣不窮之句、以是觀之、師于生死關頭可謂得自在耳、師生于萬曆丙辰四十四年二月十四日、距今遷化、閱世五十八年、僧臘四十又二、蒭度弟

子若干人、所著有東林夢語一冊幷自序、華藏源和尚嘗爲師製行狀俱傳于世、於戲師自脫白四十餘禪忘身衛法磨揮擦袴歷盡塵霜、又尋常事師以孝處衆以公濟人以惠待下、以慈雖年近六旬、而性猶孺子事來輒應事過輒忘若雲流天空、初未嘗介意當斯叔世之時求如師者誠不多得、今年冬十二月其嗣法門人梅公禪師居江州法王山正宗禪寺、不忘師德、奉師爲開山第一世、又領岩藏山福壽寺、亦以師爲開山、每自念黃檗乃師最初竭力之地不有塔婆、奚以備汛掃、雖有治命不忍盡從、己立一袈裟之塔、又就法王之山樹窣堵以瘞其爪髮、書來徵激作塔上之銘、激固不敏誼不容三辭、謹熏盥拜手爲之銘曰。

臨濟之道如日麗天、光明恒赫普照大千、展轉授受繼後續、光至于太白、稱三十傳中興祖道丕闡化權太白四世師荷一着念法鼎重、不苟世緣薛蘿深處枯守芋煙、蓬頭垢面密鍊潛鞭時人企慕期作法船、詎知時變去若蛻蟬、遺囑火浴擦骨深淵、有弟知本念德弗捐、恭將爪髮樹塔山川、以彰師範、以蔭後賢、吾知自此師道弗遷、克昌厥後、瓜瓞綿綿。

時

延寶巳未七年十二月望日

佛國法姪性激熏盥拜手撰文

當山住持嗣法門人道雪稽首勒石

二四四六　鐘　銘

近江州法王山正宗禪寺鐘銘幷序。

當寺、乃山僧手闢之地、嘗請先師大眉善老和尚、爲開山始祖、而寶構頗成焉、因思禪林禮樂、莫先乎鐘、況此方眞敎躰、清淨在音聞者乎、以故衆法護、新鑄巨鐘以備昏昕、庶幾大行法王法令、恢張正宗紀綱、其願可謂廣且大矣、住山道雲、爲之銘曰、

宣敎傳道兮、豈假語言、克明厥理兮、洞徹本源、人天號令兮、蒲牢爲尊、晨昏考擊兮、震動乾坤、妙音普被兮、均證圓門、聞性空寂兮、互融六根、禮樂繁興兮、祖道恒存、仰祝萬歲兮、用酬皇恩。

臨濟正傳三十四世住持沙門梅巔道雪撰。

幹緣比丘覺堂象峰同

伴氏紹雲　河村宗泉
伴氏活山　松本玉岡
西川淨心　及勝見
似休　川端紹仙
諸居士募衆鑄焉

元祿八年、歳在乙亥十月吉旦、監院比丘挑鋒謹識。

伴紹雲活山、松本玉岡、西川淨心諸檀越、鑄大鐘成、鳴鐘示衆、百尺高樓竣工日、千鈞大器出爐辰、旦喜衆檀齊着力、不慚昔日布金人、正恁麼時、只如最初一槌、如何下手、遂打一下云、轟々列々震天地、直得禪林禮樂新、又連兩下云、佛日增輝大千界、堯風永扇萬斯春。

住山沙門雪梅嶺書。

大光寺

大光寺は宇津呂村大字土田に在り天台宗眞盛派なり寺傳に開基は惠心僧都なりといふ、後世衰頽せしも慶長七年の檢地帳に寺境内除地なりを記す、寛文四年覺譽正吟比丘再建す之を中興第一世とす、蓋し延寶の記錄には淨土宗と見ゆ、されば天台眞盛派に屬せしは其後なるべし。

寛太寺

寛太禪寺は宇津呂村大字土田に在り黄檗宗なり、本尊石造藥師如來は當村畑中の池中より出現す、正宗寺の泰岳和尚靈驗を夢想し遂に一寺を建て石像を安置し瑠璃光山寛太禪寺と稱す。

眞成寺

眞成寺は宇津呂村大字土田に在り、眞宗本派なり寛和二年佐々木彦太なる者惠心僧都に歸依し入道して即乘と號し圓頓の教を學び草菴を結び天台宗に歸し本乘寺と稱す、後ち佐々木氏の支流原田安盛削髮して當寺に在り、偶々親鸞聖人の錦織寺に來るや其高德を慕ひ弟子となり了正と號し眞宗に歸し眞成寺と改稱す、爾後傳燈相承する所なりと。

西光寺

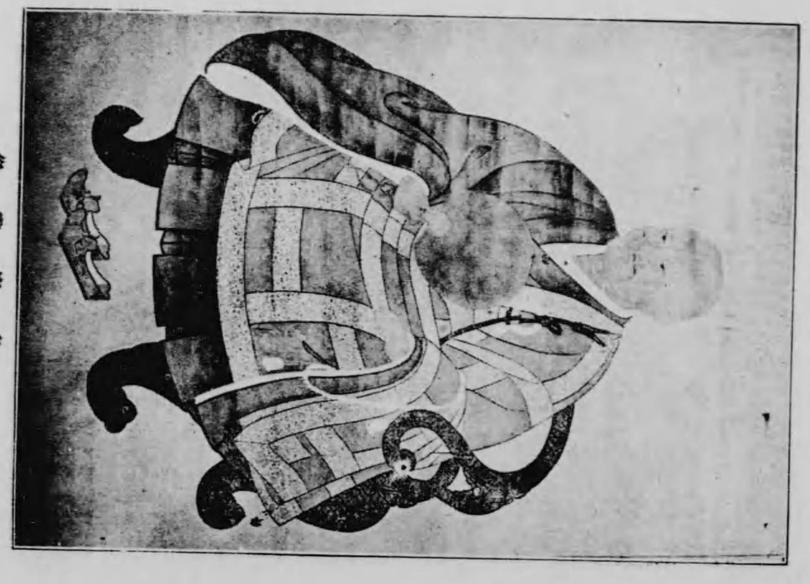
西光寺は宇津呂村大字中村に在り淨土宗なり、龍龜山大雲院と號す、開山貞安は相摸國三浦黑沼能登守滿教の子なり、僧となり能登の西光寺に在りしが天正中亂を避けて近江に來り織田信長の知る所となり七年五月二十七日法華宗と法論を戰はせしめし時貞安は淨土宗の對論者なり、（安土時代志參照）既にして淨土宗勝者に歸せしを以て信長白銀を與へて之を賞し安土山下に寺地を與ふ、十一月五日新始をなし八年九月に至

りて就る逼して西光寺と號す、同十四年豐臣秀次八幡山に城を築くに及び城下の町家を其山下に移す、當寺も亦移る今の地是なり、當時與へられし邸地は東西六十間南北百十八間なりき、今安土に小字貞安あり是れ當寺の舊地なり。

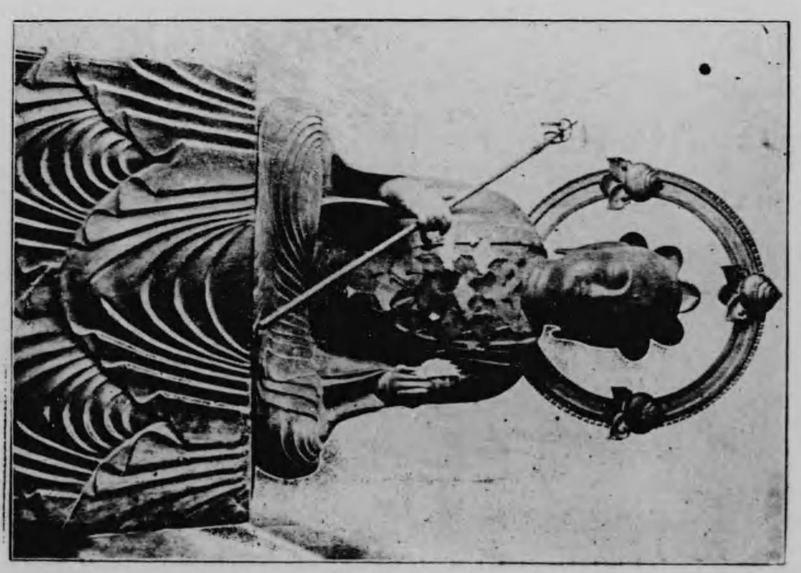
正親町天皇天正十三年勅願所の綸旨を給ふ、同十八年七月十六日後陽成天皇亦勅願所の綸旨を下し給ひ十九年二月二日大雲院の勅額下賜の恩榮あり、別に西光敎寺の額あり是れ安井門跡の下し賜へる所なり、慶長六年十一月十日貞安眞言宗の僧と法を問答す、宗法問答と稱す自筆の問答書現存す、始め豐臣秀次寺領十八石を寄す德川氏亦繼承して寺領を安堵し朱印狀を交附す、享保七年九月二十四日祝融の災あり壯麗の佛閣烏有となり貴書重寶多く灰燼す、住僧仰譽四方に募財し舊規に則り再建す、是より先き享保元年仰譽は洪鐘を再鑄す八幡町の富豪を始め遠近の信者資金を寄附す、鐘銘中に戒名百四十二靈を刻するは其寄附者若くは其の緣故者なり、寺寶に織田信長の畫像信長が貞安に與へし杖、及び貞安の法衣等存す、左に鐘銘及び宗法問答を記す。

二四四七　鐘銘

南無阿彌陀佛



八の答問土安



貞安畫像

寶圖、蓮華藏地

織所寺光西林大村呂津宇

龍龜山大雲院西光寺。

鐘銘幷引。

寺者在江州八幡松竹鎖煙、鬱密森沈也、其春也野花紅鋪地、芳草翠連天、其夏也。薰風南來殿閣生涼、其秋也、幡山之月催古清水之興、其冬也一點梅蘂和西嶺之翠馥西序景坐可愛乎、　貞安上人甞開此山時、平信長領賜公田充香積糧亦　元和年中東照神武君、新被附朱璽爲乎金湯、爾來興起日新、雲堂佛殿笏室門廡烝備也、雖然舊樓廢頹、纖鐘不窈響絲是余轉鴻鐘一音將推群心蜋械越叩十方檀婆、宰官長者、善信男女等、建樓泊鳴鐘、鉤鑄已成矣、夫鐘者處法器之始、匡於藂規整於敎令鐵圍幽暗止酸楚、其勛不可稱計矣、伏冀打鐘一聞之輩、現禳一切災厄、當得無爲安樂、愼乞擁護佛法、天神地祇、冥垂守衛照鑒寺院住世久固利濟群類永無窮。

佛陀所護、　山孕祥禎、　煉銅鎔鐵、　梵鐘茲成、　方懸篪篪、　或哮或鳴、　激蒙驚夢、

啓幽迪明、　矩傳百世、　響應八紘、　根塵空寂、　聞覺無生、　能處雙泯、　本性金清、

維功維德、　言播言行、　靈威悠久、　利國福泯。

享保改元歲舍丙申仲冬十五日。

貞安八世見住、信蓮社仰譽誓阿林應謹誌。

仰信深志願施主、當山念佛講中衆、並八幡町、中村、十林寺村、丸山村、伊庭村、篠原村、惣檀那中、當八幡隣郷近在、助縁檀越、善信男女等、鳧師長村住、黄地氏金左衛門尉藤原正永製。

大梵鐘造立助成施主。

伴氏、扇屋、庄右衛門尉資由入道是山。
西川氏、大文字屋、理右衛門尉定員。
西川氏、松前屋、次郎兵衛尉吉眞。
曾我石氏、中村屋、三郎兵衛祟宣。
曾我石氏、絹屋、太郎兵衛尉定正。
世繼氏、鐵屋、四良七郎尉吉喜。
西川氏、松前屋、傳右衛門。
西川氏、大文字屋、庄六尉正成。
伴氏、扇屋、彦四郎尉資辰。
伴氏、扇屋、源太郎尉資靜。
村井氏、馬淵屋、金右衛門尉正芳。
堤氏、宇治屋、傳右衛門入道宗元。
蒲生郡棟梁高木日向椽光達。

此間〈刻入戒名百四十二靈

三尺五寸鳴鐘、寛永十三天十一月十五日。
然譽上人代、三尺六寸梵鐘銘曰、
寺院堅固、師檀和合、二世安樂、悉地成就。
爲攸譽宗悅善士菩提令再興之。

施主　江南利兵衛

干時天和三天十月十五日覺譽上人代。
光譽如壽善尼淨譽皎岸良清轉窓榮眞。

二四四八　當寺文書

宗法問答

抑染一紙事、雖同無智之輩爲顯國守幷諸人疑慮下老婆心云。
眞言一非大阿闍梨之者不知其内證依何師云事。
貞安會云、顯汝書物大日法身秘密之說出過心地之三摩地門者、其大日法身者、法界、天

形、人相、即是大曼荼羅之聖衆也、刀劍鉾楯、即是三魔耶曼荼羅之躰相也、去來進止、行住座臥皆是羯摩曼荼羅之事業也、法尒文字隨緣、万法、皆是法曼荼羅躰相也、是理不顯云秘密也、是本有實相本來成佛之理也、存何師乎。

眞言ヨリ扨出過心地三摩地門云事。

眞安會云、阿字之極意、三不可得之正躰、佛祖不傳言語道斷心形所滅之處也、故汝祖師弘我覺本不生出過語言道云云、徹此眞理見傳何物爲何者師不知此理明遍之遺跡名乘事誠ニ讓惡弟師者歟。於佛法有方便眞實、二汝不知方便之說何況眞實說乎、不知此義者難遁盜人之來果乎。

眞言ヨリ又秘密最初心初入門之眞言相應印、及觀念有之、此三相應、名三密加持、名若知之者可聞其体也云。

眞安會付此、有五種、觀印、一通達菩薩心、觀自心如滿月、在輕霧中、論云、令於九識眞如理處通達得本有仙性大菩薩心、二修菩薩心論云、觀自心如清淨滿月輪菩薩心義云、於本有性德菩薩心得修得菩薩心云々、三成金剛心論云觀心月輪中有金剛蓮華、四證金剛心、論云五部惣合成一塔婆身五佛身圓滿、論云觀身爲本尊衆相具足二利圓滿之位也、初地即極法身即到云云、此義汝家、雖法、無智之心底此觀智不可成乎。

眞言眞言家之中有字印形像三密之傳、一々字則有惣持之義云。

眞安會云惣持者万法所治之根元是云阿字、何字印形像之三密限乎、我宗有此義、其文云、究竟一乘此至于彼岸云云、亦實相直躰者法然之法語云、尤我宗之元祖之言不用者何語用乎、其上實相之言法然以來非法語可笑々々。

又實相之名言故眞言者五種言說之中、如義言說可成之由云。

眞安會云五種之言說者、釋論立眞生二訓、是眞妄相待之言說也、淨土宗者他力不供之言說也、非汝所意也。

眞言ヨリ一眞言不成佛之物語、每座專有沙汰云。

眞安會云、眞言非云不成佛望末世之杭眞言、法難成、縱雖爲顯教之法尼入道之無智輩、觀念觀法難成乎、若不成云者、末世相應修念佛法、說也、眞言出息者、不成佛入息者成佛云。

眞安會云、生死二法當時、出息汝家、當即身成佛、入息我宗、任報身捨命之道理用入息也。

又眞言ヨリ、又法花之中童子戲聚砂爲佛塔、皆已成佛道之文云々。

眞安會云、童子云文字付而不知此文極意文、儘取義理者、三世諸佛之怨今知思、此文有極意、不知此理而高野山立五論石塔事、是盜人也、但不知汝一人歟。

又眞言、入里乞食將一比丘寂劣僧云事。

眞安會云、釋迦如來最劣之僧可云乎、出家不知爲本意故乎。

又眞言三寶之中併寶是下也云事。

眞安會云、汝家高野山集俗人歟、或取知行成賣買事、是以非出家本意、其上三寶者理智悲之三躰、法報應三身也、汝不知此理圓頭着三衣事、同鬼畜可痛云々。

又眞言、以念佛方便之中、方便善根之中、遠因也云事。

眞安會云、念佛乍云方便、又念佛之行者是當來道師之時初入佛法、正桭云、前後相違、誰用之、又眞言經中若於顯教修行者久經三大無數劫云、又題教即身佛云、是又前後相違之過失也。

又眞言、大日五輪五大之種子眞言也云、又彌陀大日所現、彌陀云事。

眞安會云、此義一宗之立破而余宗不用之、天臺五輪五大妙法蓮花經、五字當吾宗地水火風空識、六大南無阿彌陀佛之六字當皆是宗々談異也、守一歟、一亦莫守。

眞言、又大毘盧遮那佛流水四方佛之證文、彌陀西方之一國中央大日覺王之讓也云事。

眞安會云、東西南北立事、迷妄、方便也、汝是存眞實乎、既文迷、故三界城悟故十方空本來無東西、何處有南北云々、彌陀西方一國之義、我宗有子細、十方飯一云西方汝國之眼、以淨土之深義、不知故也、非無智所測、

眞言又大日覺王云事。

眞安會云、是又一宗、執見也、文殊般若經云、三世諸佛依念佛三昧成等正覺云々、三世諸佛依彌陀成覺、豈是非覺王乎、十方三世一切如來不依眞言無成佛云事、怪々異說、非今始云々。

又眞言、以眞言爲日月、以念佛爲夜燈云事。

眞安會云、觀經云光明遍照十方世界云々、是尙其深云々。

又眞言、懷感之釋。

眞安會云、眞安汝非毀乎、又善導般若經云人師、經譯始而承候。

眞言釋迦一代之法中說出世本懷、法花經上代天台、祖師智證、法華尙不及眞言云、劇余經乎云。

眞安會云、我宗、諸宗不類、其文云唯佛獨明了云々。

又眞言、法然四百廿年以來云事。

眞安會云、過去遠々如今日、上代不賢、末代不愚、其上三世一念無差別、眞理不知謂也。

又眞言當代念佛衆、末徒、何忘源濫迷流派乎云事。

貞安會云、淨經云從如來性解法如々云々、楞伽經云、十方佛刹中所有法報應身變化諸菩薩皆從無量壽極樂界中出云々、其上玄義序題文云、眞如躰量々性不出蠢々之心、法性無邊々体、卽元來不動無塵法界凡聖齋圓等云々、是豈非知源濫乎、出世本懷云義、我宗在之、大經云惠以眞實之利云々、是出世本懷之證也、大悲本懷云義視經云、五逆十惡具諸不善具足十念稱南無阿彌陀佛云々、華嚴祖師元曉法師述阿彌陀本懷、兩尊出世之大意四輩入道、要文也判、法相慈恩大師造西方要決、讃念佛其文云、末法万年余經悉滅、彌陀一敎利物偏增云々、又飛錫禪師念佛寶王論造、其論云、念佛三昧善之冢上、萬行無首、故曰三昧王云々、此等之趣汝無智至不便云々。

眞言云、天竺達摩、日本弘法、唱彌陀事。

貞安會云、達摩碑文云、不踏心地而直登靈臺、不似工夫而頓開覺藏、念超無念、々佛三昧生勝無生、往生淨土門也云々、故禪山頭、佛事十邊唱彌陀事、分明也、又弘法念佛之事、汝既聲卽實相以爲眞言、風大豈非彌陀乎、弘法入定記云、我山眞言上乘之地而更余宗不可建立、但念佛制外也、空海念佛而承和二年入定云々、故至于今高野山念佛不退轉也、是其證也、又弘法嵯峨之帝之時、於清涼殿放光之義勿論也、我風祖師法然文治二年於大原龍禪寺天台座主顯眞始八宗之碩學三百餘人集雖論談決擇、自力之法當杭難叶、故各歸伏法然、三七日別旦念佛被勤修之、旦法然上人自口弘光明給事歷然也、卽成一卷書是號大原問答事、天下流布之也。

又眞言於東寺、賜敎王護國寺之額ト云事。

貞安會云、我宗祖師善導大師、金剛法師宗論之旦從口吐三尊化佛、其時自皇帝賜悟眞光明善導大師淨業大和尙之額、何爲諸敎之王云哉。

又眞言唯除五逆事。

貞安會云我宗之不知敎意故歟、有抑止攝取云事也。

右五箇條之趣、以蟷螂釿如向龍車可笑云々、抛萬事卽身成佛之義、立地可顯現者也、若明文計而卽身成佛之義眼前不出者、如法度可被渡三衣者也、高野第一之阿闍梨之佛法、此一紙至極以直面不決勝負者、持參天下可成笑物者也。

慶長六年壬霜月十日　　貞安　花押

旅庵寺

旅庵寺は宇津呂村大字中村に在り清景山と號す天台宗なり、本尊藥師如來は傳敎大師の作、平景清曾て護持佛として崇敬せりと傳ふ、當寺は始め神宮寺と稱し又惠命寺

と號せしが慶安三年十月清景山旅庵寺と改稱せり、寛政中信徒等日光月光及ひ十二神將の像を新彫して本尊の左右に安置し開眼供養を爲せり、船木香梅寺の僧表白文を撰す、慶安三年の文書と併せ左記す。

二四四九　當寺文書

江州蒲生郡中村神宮寺、爲續佛結之惠命寺號、於再呼而令號清景山旅庵寺眞光房者也、仍正法弘通利益衆生所如件。

慶安三年庚寅十月十日　　山門執行正覺院權僧正豪慶　印

二四五〇　岡山村船木中江菅藏氏文書

旅庵寺藥師如來開帳表白。

謹敬白、五百塵點實修實證釋迦牟尼世尊、十方佛刹諸佛善逝殊、本尊界會　藥師如來、日光、月光、十二神將、顯密權實、一切聖教、極樂淨土、清淨大會、觀音勢至諸菩薩、鶖子善現等、大賢聖衆、總盡虛空界周偏法界、三寶境界而言、方今娑婆世界一四天下、南贍部州、大日本國江州蒲生郡八幡中村、清景山旅庵寺厚信檀主某、久懷拜於此尊、新彫刻日光月光十二神將、像安置本尊左右、屈清淨大衆、修法華三昧妙行、其旨趣何者、夫行善先萌起自膽禮得脫、與致專在結緣、爰以三世諸佛作當來歸依遺眞影一代說教、爲衆生繫屬讃徽善故

和漢等敬靈像、古今同尋名跡　眞俗大訓緇素清葉、伏惟藥師如來以無緣大慈守色心二法、故像法轉時之利益無如此尊、衆病悉除之悲願越餘佛加之、免七九之夭薩忽却慕惡災難立招無邊之福祐、況當本尊者、叡岳開祖傳教大師一刀三禮尊容、景清護持本尊、五百年來光和、此處靈驗尤多、況又中有火災靈殿二度燒失、雖然眞容倍全可謂末世眞身、佛躰日域第一尊容、是故六十年來方開錦帳、使群衆渴仰廣結緣。若爾者一拜一禮、是現世安穩、芳契、低頭擧首、併後生善處種因、重乞來入聽聞、貴賤等仰衆病悉除、本誓結緣値遇、道俗同滿衆望如意之願、敬白辭短、衆願旨長、抑爲令法久住利益人天護持檀主各願成就。

南無摩訶毘盧舍那如來、　南無金剛手菩薩。

開帳供養之場、法華三昧之砌、飡受法味爲證明功德、上天下界、神祇冥衆定來臨影向、然則釋梵諸天、護法諸龍、扶桑國內神祇冥道、主城鎭護、勸請諸神、願因本誓證所修必垂影向明王至誠爲威權增輝納受法施。

一切神分般若心經、　奉爲金輪聖王玉體安全寶祚延長、　南無摩訶毘盧舍那如來。

南無藥師瑠璃光如來、奉爲太上法皇儲王諸院三台九棘各願成就。
南無摩訶毘盧舍那、南無釋迦牟尼寶號爲寺內繁榮、廣作佛事、南無摩訶毘盧舍之
南無仁王經名、里々村々五穀豐饒。
諸人快樂、南無藥師瑠璃光如來。
南無日月光十二神將。
爲信心檀主等各願圓滿。
南無藥師瑠璃光如來。
南無日月光菩薩。
爲乃至法界平等利益、南無摩訶毘盧舍那如來。
南無金剛手菩薩。
南無大聖不動明王。
南無一字金輪佛頂。
南無一切三寶。

正福寺

正福寺は宇津呂村大字宇津呂に在り眞宗木部綿織寺派なり、天正六年八月僧印藏なる者天台宗を改めて眞宗に歸し綿織寺派に屬せり。

東漸寺

東漸寺は宇津呂村大字大林に在り臨濟宗妙心寺派にして本尊正觀音なり、當寺草創の年代祥ならず境內に曆應元年及び應安二年の石燈籠を存すれば其頃隆盛たりしを知るべし、後ち兵燹の災あり僅かに一小堂を建てゝ本尊を安置せしが寛永十年代官中島兵右衛門尉宗積遠源禪師を招請し協力して寺堂を建立し惠光山東漸最乘禪寺と稱し妙心寺派に屬す、寺傳に此地は佐々木氏の臣杉山氏の邸趾なりといふ、寛永十一年伊達陸奥守の領地に轉ず、遠源住山年を重ね大に禪風を震ふ既にして勅命を蒙り妙心寺に晋山し、梅嶺代つて當寺に入る、寛文二年伊達氏當寺を歸依し菩提寺の格を與へ土地を寄せ四年四月境內禁制の札を下し竹木伐採落葉下草苅取と鳥獸の殺生寄宿狼籍等を禁す、（江戸時代志參照）貞享年間回祿の災あり三世關捩元祿年間に再建を完了す、同十一年西村八郎左衛門大般若波羅密多經六百卷を寄附す、八世固堂の時文化二年本堂を改造し文政五年庫裡及玄關等を改造す、石燈籠銘文と大般若經奥書とを

左記す。

石燈籠銘　（一）

施主　興　元

曆應元年戊刃十一月廿二日

同　（二）

施主　□

應安二年十一月廿八日

二四五一　大般若經奥書

卷一

江州路蒲生郡林村慧光山東漸禪寺現住沙門智門謹跋大般若經六百卷之楮首。

原夫、斯經甚深妙功不應以恒沙算也、痴衲思慕得此經直本繕寫之、月深年尚矣、雖然凉德而乏於若干箇之白紙而深自韜晦未嘗肯以勸化求於他不意不日信檀西村氏叩弊室揖余謂云、茲歲當於子亡父三十三遠諱微、抛家資供養三寶欲酬慈育恩、以何一朝饗之余答伊以志願之素懷子伏而諾之投衷殫刀欲令亡父入其願海休之而即日自走洛下之經師家携銀計之黃卷六百帙手自附余、嗚呼寔斯孝道所致布有漏因而護無漏果者也、痴衲苟點毫末成褫其功績、蓋未知之縱便幸而終其功非繳余生榮後福雖然與麽未下筆已前字々盡繕寫了是吾禪活手段也、仰願遣非思量之思量募無功用之功用信檀之慈父六道四生等乘般若之慈航俱到彼岸。

別云

書寫大般若六百卷而資薦施主西村氏澤凉逸桂信士之冥福云爾

不例解空修智源。　毫端信手觀因緣。

誰知六百眞般若。　一字劃成千聖前。

于時元祿十一曆戊寅仲冬廿有六

經地六百卷之施主

死后號澤凉逸桂信士元祿十年丁丑六月廿一日逝　俗號西村八郎左衛門

泰譽義道宗仁居士　天明三癸卯秋

此經帙六百箇施主　八幡住谷氏茂根入道

興隆寺

興隆寺は宇津呂村大字多賀に在り天台宗なり、當寺は推古天皇二十七年聖德太子比牟禮山上に草創ありし古刹なりと傳ふ、延文元年の東寺文書に興隆寺と成就寺とが

比牟禮山下に在りし事を記すれば當時は比牟禮八幡宮に近き所に在りて有勢の寺たりしを知る、一説に法華ヶ峰北谷に在りしといふ、永祿中佐々木義賢入道當寺客道の事幷に修驗道の事につき沙汰せり、（佐々木氏世代志參照）天正四年織田信長安土山に築城し城下町を形成せしめし時金勝寺の僧應譽をして曩に燒亡せし慈恩寺趾に一寺を建てしめんとし當寺の本堂を移轉す今の淨嚴院本堂是なり、本堂を奪はれし當寺は爾後名跡を存するに過ぎざりしが寛永十年僧琳下坊なるもの現在の地に一寺を建て廢を興す、幕府領の代官小堀遠江守及信徒等協力して工を援け爾後法燈再び明なり、寛永の書上には境内方十間御年貢地弐畝高二斗四升と見へ延享二年九月の書上には六畝十七歩高六斗六升七合とあり現在の境内は一段五歩なり。

二四五二　當寺文書

興隆寺

多賀村壽德寺出入有之付而、山門之末寺興隆寺取立可申之旨、從旦方中之折紙一段神妙之義に候、彌々寺成就之樣に可然候、此旨大僧正へも可申達候間、其分可被心得候、猶琳下任口上仁不具候、謹言。

極月廿日　白毫院（花押）

琳下

旦方中

二四五三　當寺文書

山門之末寺興隆寺取立申度之由神妙に被思召候、成就候樣に皆々可被精入候、則小堀遠江守殿に、觀音寺より被仰入候樣にと、大僧正より被申越候、猶趾より正林坊に可申付候間、其分心得可被申候、恐々謹言。

五月八日　最敎院實名（判）

竹林坊僧正實名（判）

琳下

旦那中

壽德寺

壽德寺は宇津呂村大字多賀に在り淨土宗なり創立年代詳ならず、天正元年得譽祐泉

再興す、祐泉は元和九年閏八月十二日卒す、淨嚴院過去帳に同年月日得譽祐泉大德八幡北之庄壽德寺住と見ゆ、寛永十年興隆寺再興の頃當寺と交渉問題ありし事同寺文書に見ゆ、明暦二年專譽天阿の時更に寺觀を加へ法燈を揚げたり。

東照寺

東照寺は宇津呂村大字多賀に在り、天台宗なり、本尊藥師如來は牧の岡山城主九里氏の崇敬せし古佛なり、九里氏滅亡後八幡町の藥師町に安置し元和二年當寺を建立し移して本尊とす。

圓滿寺

圓滿寺は宇津呂村大字多賀に在り臨濟宗永源寺派なり、貞治六年僧寂室の草創せし所なりと傳ふ、寂室は圓應禪師にして永源寺開山なり、願成就寺所藏大般若經奥書中に永德元年三月圓滿寺にて書寫の事を記すれば古刹たる明なり、中古兵亂に回祿して衰亡せしが江戸時代に至り中興され法燈再び輝けり、境内に石造地藏菩薩を安置す、其像下より曾て經筒を出し中に古經三卷と齒三個とを入れありたり是れ享保

十一面觀世音、國寶

宇津呂村多賀圓滿寺所藏

七年九月十四日薨去ありし前關白藤原基凞の供養品なりと傳ふ、佛殿に應圓院前關白大相國悠山證嶽禪閣享保七年壬寅九月十四日と刻する靈位を安置す、然れ共其因由今詳ならず、本尊十一面觀世音は明治四十二年九月國寶に指定せらる。

西照寺

西照寺は宇津呂村大字北之庄に在り眞宗木部錦織寺派なり、始め津田權太夫の建つる所なりといふ、寛文八年僧清賢中興せんとして果さず安永五年榮全の時再建を成就す是れ現在の堂なり。

舊緣寺

舊緣寺は宇津呂村大字北之庄に在り眞宗大谷派なり、豐臣氏の臣井上良秀關ヶ原役後隱遁出家し一堂を建て阿彌陀如來を安置す、偶々教如上人の大谷派本願寺建立の時に遇ひ其子元智其派下に屬せり、享保十五年井上元秀堂宇を再建す乃ち現在の建物なり。

第五節　島村

長命寺

長命寺は島村奥島山上に在り寺傳に武内宿禰山を闢き聖德太子に至り當寺を創立あり武内宿禰の長壽に困みて長命寺と號し太子自作の觀世音を安置し本尊とすと。天智天皇蒲生野御幸の時當寺に臨幸あり天下泰平寶祚延長の祈禱を命せられ勅願とせらる云々と見ゆ、島山に產する郁子を無病長壽の瑞果として同天皇の時より獻上し長く皇室に供御せしに併せ考へても長命寺の寺號を解すべきに似たり、此時代の史料を存せずと雖も蓋し古寺なり、既にして一山衰頽す承和三年野洲郡仁保鄕に僧賴智なるものあり小田明神の示現を蒙り當寺を再興し寺觀を加ふ、元暦元年源賴朝の下知により佐々木定綱堂舍を造營し天台座主明雲の高足尊海入寺し延暦寺西塔院の別院として寺運愈々隆盛となれり、一說に佐々木定綱の菩提寺にして長命寺殿はその諡號なりと記すものあり是れ僞說なり、定綱の諡號長命寺殿は後人の追諡にして佐々木氏に寺號の諡あるは時信氏賴の時代を始めとす、寺藏古文書中の最古

本尊　千手觀世音、國寶

聖觀音、國寶

島村長命寺所藏

十一面觀音、國寶

地藏菩薩、國寶

毘沙門天、國寶

島村長命寺所藏

を承保元年奥島庄司土師助正の解文とす、此解文は助正の父是時が所傳の田地を長命寺に寄進せし公驗なり、承保は定綱の時代より百餘年前なるにその寄進狀に明かに長命寺に施入と記す、此解文は郡内第一の古き文書なれば古代志に全文を記せり、當寺には鎌倉時代以後の文書記錄多く存し寺制寺職寺領造營皇室以下公家武家の祈願等に係る史料のみならず地方志に適切なる時代史料少からず、故に凡そ區別して總てを採集し左に節を分ちて之を記すことゝせり。

(一) 寺の再興と延暦寺西塔院の別院

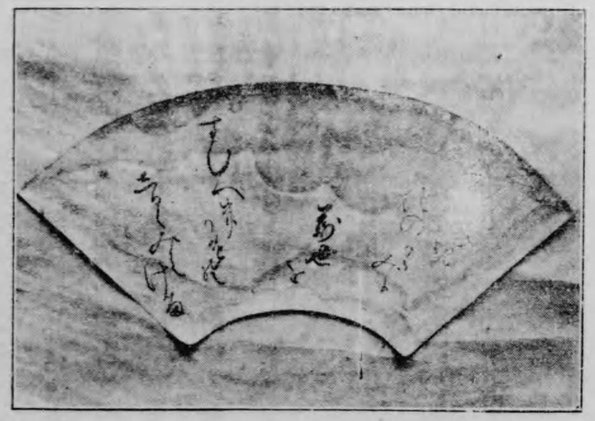
當寺は承和三年賴智の再興以來延暦寺西塔院の院務領となり寺を別院とす蓋し特例なり、文永六年十一月西塔院の十學頭は連署して改めて別院の認狀を下せり、爾後西塔院院主より當寺の別當寺務兩職の補任をなせり。史料後記

(二) 皇室の祈願

天智天皇六年大津宮より行幸ありしは既に記せり、文永七年後深草上皇は院宣を下して國家安泰の祈禱を命せらる是れ蒙古來寇による祈願なり、爾後數度の院宣を受

け一山の僧衆は精誠の祈禱を修し、歴朝不易の勅願所として事ある毎に國家の祈禱を爲すのみならず毎年正月元日より一七ヶ日間は天下泰平寶祚長久の祈禱を修し卷數を朝廷に獻ず、又年々青梅獻上の佳例あり世々柳原家の執奏を經たり。史料後記

後奈良天皇宸翰



島村長命寺所藏（國寶）

（三）佐々木氏の崇敬

佐々木六角氏の祖壹岐守泰綱は島郷内の田地を寄附し佛前の常燈用費に宛て武運長久の祈禱を修せしむ、建治二年五月泰綱卒し、備中守頼綱家を續ぎ九月書を當寺に寄せて乃父の時の如く別儀なきを沙汰し祈禱の事又精修すべきを依頼せり、（佐々木氏世代志頼綱の條に全文を記す）元應二年五重の塔就り竣功の式を行ふ、佐々木時信馬一疋を奉加して之を祝す（時信の條に、全文あり）佐々木氏の崇敬此の如くなるを以て當寺も亦佐々木氏の賀儀あれば金品を贈りて祝意を表す、永和三年十二月佐々木滿高の家督相續あるや勘料用途五百五十文を出せり、蓋し寺領に賦課さるゝ所なり（滿高世代志、に全文あり）天文十五年十二月佐々木定頼足利義藤加冠役を命せられ坂本に在り、當寺は青銅を送りて之を祝す、二十一日定頼之に答ふ。（定頼の、條參照）

（四）薦次の規定

永仁三年三月阿闍梨智賢圓信圓俊等一山の衆徒は寺僧の薦次を定む、薦次は寺内に於ける僧の順位なり、其規定は年の老少によらず又在寺年季の長短にもよらず受戒

數の多きものを一藺とし順次藺次を定めたり、正安三年十一月更に先例により藺次を追定す、然れ共後世の藺次は變更され今は年季の長きを一藺とす。

(五)　佛供燈油田等の寄進

當時佛前の燈油佛供等種々の名義を以て田畠山林等を施入せしもの古へより少からず、是れ地方に於ける當寺觀音の信仰盛なりしを語るものなり、現存史料にては承保元年奥島庄司土師助正の解文を最古とす、以下承安、建保、承久等鎌倉南北朝時代の寄進狀數多し、これ等寄進狀は寺領の史料たるに止まらず土地の表示に條里坪名の記載ありて條里制度の遺蹟を推定するに有力なる史料たり、又其他在住民の姓氏を知り併せて當時に於ける信仰の狀をも窺知するを得べし、これらは必用各所に引用したれば殘る文書のみを後記す。

(六)　西國三十三所觀音の巡拜靈場

三十三所觀音靈場巡拜の起源は華山法皇に始れりと傳ふ、蓋し法皇の巡拜並に其後鎌倉時代末期までの三十三所の觀音は必ず一定の觀音に非ざりき、現在の所謂西國三十三所觀音は南北朝亂に古寺の燒亡するもの多く爲に觀音靈場に轉變を生したるものなるが如し、後深草天皇より後醍醐天皇の御代までは御祈願の三十三所中近江國は石山岩間觀音三寺と袋懸と四ヶ所たりし事御修法記に見へ（觀音正寺の條に詳記す）當寺の名は見へざりき、當寺の史料に見ゆるは永正十四年再建勸進帳中に

傳聞琰魔法王於日本國觀音利生之靈地點于三十三所銀於金簡道于人間云々、然則花山法王忝廻玉駕於卅三所奉仰濟度於卅三身矣、自爾已來日本一州合堂貴賤四輩運歩當寺是其隨一也、靈驗殊更揭焉哉。

と見へ三十三所の觀音は炎魔法王の點定なりとの說は奇拔なるも當寺が三十三所の觀音靈場たる事は既に久しき以前より、なるを主張せり、されば永正より近き應仁文明の亂にあらで南北朝戰亂以後今の所謂三十三所の點定され當寺觀音の靈威は愈高く貴賤道俗の巡拜旺盛となり。

八千とせや柳に長き命寺はこぶあゆみのかざしなるらん。

の觀音咏歌は今も遠國近國の巡拜者が鉦の音と共に高く唱へらるゝ所なり。

(七)　一山の兵燹と再建

戰國以來軍事行動の開始さるゝ時武將は當寺に陣取放火等の禁制を寄せし事屢なりしが、永正十三年八月佐々木氏の重臣伊庭氏亂を作し九里氏と合して佐々木高頼に抗す（軍事志參照）同月下旬當寺其兵燹に罹る始め兵火は寺内の坊舍に起りしに飛火終に本堂に延燒し一山の堂塔悉く灰燼す、住僧等再興を企て翌十四年勸進に着手し爾後六年を經過し大永二年八月棟梁津田の治郎右衛門太郎左衛門等新始を爲し廿九日立柱式を行ひ四年三月本尊の厨子に着手し八月十日遷座式を行へり、眞靜房澄尊當時の住持たり、それより百日間開帳を爲すこれ現在の本堂にして明治三十七年二月特別保護建造物に指定せられたり、本堂の鰐口は天文五年七月深尾久吉の寄附にして八日市鑄物師の製作する所なり、天文五年七月の結解中に「六月廿日八日市鑄物師本堂ワニクチノ事ニ兩三人來ル、二十七日ワニクチ取ニ來ル鑄師兩人、七月一日八日市ヘワニクチ見ニ行、二日ワニクチ以テ來ル鑄師大工衆飯米下、ワニクチ木ウツ大工飯米下」等とあり從來の鰐口をも溶解して再鑄し七月二日に鑄師と木工大工登山して本尊前に掛けしを知る、參拜人が現在打鳴す大金口即ち是なり銘文左の如し。

近江劦蒲生下郡長命寺本堂御寶前願主深尾次郎右衛門尉久吉

天文五年丙申七月二日　八日市太兵衛　新左衛門

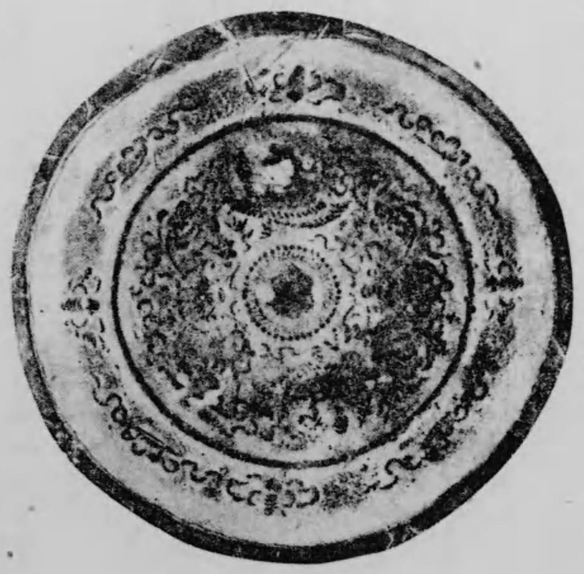
本堂に欄干の擬寶珠四個あり其中二個には近江州姨綺耶山長命寺本堂本願春慶上人とあり、又他の二個には近江州姨綺耶山長命寺本堂米津清三郎女爲後生菩提也、慶長十六辛亥年二月十三日と刻す、德川氏の代官米津清左衛門の一族が慶長修繕の時の寄進なり、三重塔の擬寶球には慶長丁酉二年五月二十日近江州長命寺と刻す、一山の僧坊は元祿五年の書上には一山十九坊あり岩本坊、圓明院、妙覺院、修練坊、寶持院、寶乘院、眞靜院、慈禪坊、敎智坊、禪林坊、金乘坊、眞敎坊、蓮藏坊、本行坊、圓行坊、善藏坊、延壽坊、眞藏坊、寶樹坊、是なり、寶曆年中より圓明聖行二坊無住となり寛政元年に至り眞敎本行善藏延壽眞藏寶樹岩本の七坊も又無住となる。

（八）　織田豐臣德川時代の寺領

永祿十一年織田信長近江に入り佐々木氏に代りて政令を布くや十一月臣丹羽長秀村井貞勝は當寺坊領知行分に當年の所務を納むべきを達したり、其後信長の史料存せざるも安土築城後屢奥島山に放鷹し當寺に宿せし事あり信長と當寺との關係圓滿なれば寺領も元の如くなりしならん、信長薨じ豐臣秀吉代つて政令を布く秀吉當寺を祈禱所とし諸役を免せし事天正十一年五月早崎家久の文書に見ゆ（時代志參照）後

ち秀吉近江の地を撿し古への莊園制度を改めて知行制度となすや古來の寺領を沒收し換ふるに愛知郡平流鄕にて百石の寺領を與へたり、德川家康又其寺領を安堵し

古鏡背面　唐草雙鳥鏡



長命寺所藏

爾來百石の御朱印地として明治維新に及べり、其時代の史料は各時代志に引用す　明治元年五月寺僧は國恩に報せん爲め金五拾兩を朝廷に獻ず。

當寺は西國三十三所觀音第三十一番の靈場として湖涯の山上に在れとも古來遠近の參拜人踵を絕たず、一山の堂塔備り啻に近江の名刹たるに止まらず湖山の眺望快濶にして景勝の名亦世に高し、本尊千手觀音立像以下地藏菩薩、聖觀音、十一面觀音、毘沙門天等の木像、及び寶冠阿彌陀如來、勢至菩薩、釋迦三尊、涅槃像等の繪畫合九點の佛像國寶に指定せられ國寶の多數郡中第一なり、又古文書の存するもの各編に引用せし以外鎌倉時代以後撿斷にかゝるもの、寺領の爭論、寺僧の爭鬪等各種の史料あり、又嘉吉二年天文二年より數年間の結解書、大念佛帳等あり、大念佛帳は無緣者の爲に每年七月と八月兩度行ひし供養帳にして戰病死者疫癘餓死災死者等を記し歷史上參考とすべきものなり繁なりと雖も併記せり、版本大般若經六百卷あり卷一と九に左の奥書あり。

(一)貞和四戊子年四月日奉迎即加修補近江國高島郡勅旨寺願主覺玄

(九)春日御社執行正預正四位下中臣連遠忠

二四五三の一　當寺文書

當寺被訴申寺務間事、及大師勸請之起請可離寺之由、進連署狀上者、被止宴聽法眼執務候也、殊可被致□隆之誠之由、依院主法印御房御氣色執達如件。

正應二年後十月廿三日

長命寺執行御房

二四五四　當寺文書

長命寺々務職間事、寺僧等就于十箇條濫訴下預御教書候之間、此十箇條之篇目、悉不可說之申狀候、仍不及陳狀、令參洛可明申候之處、舍兄宴貳阿闍梨萬事一生候之上、小熊御庄守護使、濫妨事候之間、旁以難打捨存候、天上洛遲々仕候之處、濱廊房ゝ申候者、去弘安御治山之時、犬上郡八坂强盜自廊房出立候、罪科露顯間、重々尋御沙汰候、天同九年永代可進退領掌之由、宴聰預御成敗候之間、雖領知仕候、於彼爲領之神田並岡崎作毛等者、任優如之思、雖爲少事、不相綽、預置於寺僧等候、而今寺僧等就于掠中可閣寺務之由、被下御教書之刻、去月中旬之比、寺僧等、爲末寺法師之身、無是非破取宴聰之住房剩追捕房內之納物、伐拂樹木、忽成荒廢之地候之條、希代未曾有之惡行候、宴聰縱雖不爲寺務職、並御留守之身、爲本山之住侶、爲末寺法師等、爭可失如此之面目候哉、併仰御察候、何況石泉治院之時、依津田南庄公文事、雖重々子細候、南庄住房濱住房爲一所、無別煩候き、今御治院之折節、爲末寺法師等、宴聰忽被及恥辱候之條、無爾次第候、就中

於彼廊房事者、無寺務混合之儀候、二品親王之御治山、梨本宮之御治山、眞木野殿之御治山、三代之間更無別子細候、廊房相當御代、不殘一塵破取房舍、追捕取資財雜具等候之條、超强盜二盜候之上者、如元造返住房所運取之資財雜具等、悉可糺有之由、被仰下候者、畏入候、若又寺僧等申子細候は、不日悉被召上、可被尋聞食之由、可有沒御披露候、恐惶謹言。

正應二、十二月十六日

進上刑部卿律師御房

法眼宴聰

二四五五　當寺文書

還言上

濱住房之留守者、伺他行之隙、爲內納物、悉運取候之條、先代未聞之狼籍候、張行罪科爭可遁候哉、恐惶謹言。

端書

宴應二年十二月十六日　宴聰法眼奸訴狀　被追捕畢

二四五六　當寺文書

當寺別當職事。
院主御教書如此、可令存知候、恐々謹言、
應安七寅八月九日　寺務　光圓坊
快　定（花押）

長命寺年行事御房

二四五七　當寺文書

當寺々務職事、依先師法印佗房、重被成下御教書之間、請料催促之處、於貫主殿一代二代院務役勤仕之段、無其例之由、被歎申之間、被止催促之旨所候也、寺中宜令存知之狀如件。
應安七年八月廿九日　堯元（花押）（光圓房）

長命寺執行御房

端書　干時貫主實蓮院、　院主　竹中僧正御房、寺務光圓房之狀也、

二四五八　當寺文書

當寺々務職事、院主御房御教書如此、可被存知候、進物等事、任先例早可被致其沙汰由也、仍執達如件。
五月廿五日　阿闍梨快輝?

長命寺執行御房

[　　]（端書）内齡嚴坊御狀

二四五九　當寺文書

院務樣御禮、任料之事、度々申下候之處、先規無此儀之由、被對語更於貫首樣御一代院務御替に付而度々御禮無之段、先證明明競候上者、其分令披露止使候、可被成其心得候恐々謹言。
七月十六日　院主代　賢運（花押）

長命寺
年行事御房

二四六〇　當寺文書

西塔院務領長命寺々務職事。
被宛行候可被存知之旨、院主僧正御房所仰也、執達如件。
應永廿三年四月十三日

上林坊注記御房

權大僧都（花押）

（端書）

一五二

淨土寺殿貫主御時當寺補任狀

二四六一　當寺文書

西塔院務領、長命寺々務職事、被宛行候、可被存知之由、依院主太政大臣法印御房御氣色執達如件。
（德大寺公俊）
正長元年五月九日

上林坊阿闍梨御坊

橋大僧都（花押）奉

端書

梶井殿貫主御時當寺御補任案院主檀那院殿

二四六一の一　青蓮院令旨綴

所被補長命寺別當職也可被存知者依座主准后御氣色執達如件。
文明三年四月廿八日

法印經堯奉

（西塔北谷住侶實名澄運也）
常學坊阿闍梨御房

二四六二　當寺文書

就座主之事去年拾月、妙門に相渡、當院家院務職、御拘候、當寺御補任之儀、如先規可被申入之旨、院家へ被成御令旨候間、急度其通爲申觸態使者差下候、被得其心嚴密沙汰肝要候、恐々謹言。
天文廿
卯月八日

安居院善養坊
宗秀（花押）

長命寺年行事
御房

二四六三　當寺文書

右當寺者、上宮太子之草創三十三所之隨一、御堂者天智天王御願所、當國無雙之靈地也、大悲闡提誓願、無盡化物利生之慈悲無絶、凡彼山者神山所、窟詑賢聖之所遊化也、故攀此峯者、三千世界眼前盡、詣此寺者、十二因緣心底空、其功豈唐捐哉、太子建立之後、經數百年、賴知聖人、野洲郡邇保郷鎮守小田社參籠、依示現、詣太子舊跡、拜觀音尊像、伽藍建立、寺中繁榮、于今不絶處也、爰依有忠勤之功、西塔院別院蒙院號、被下宣旨之條、寺家本懷何事如之哉、然後過二百ヶ年、文永六年十一月下旬、自巳往別院之旨、重而西塔之院十學頭連署趣明白也、同七年、蒙院宣數度下、誰輩不尊之哉、何族不仰之哉、誠是、當寺眉目、敢不可混余寺余山、尤以希代蘭若、爭類末寺末社、當院別院之旨、子細既爲顯然、仍大旨如件。

大永六年九月十四日

長命寺年行事御房

二四六四　當寺文書

後桃園院御願繻珍

學頭內供奉快重

右此度爲一卷從萱堂所有御寄附也

文政五年八月

長命寺學侶中

二四六五　當寺文書

一管令啓達候然者

今般

閑院故一品式部卿宮、御子慥宮御方

仙洞御所爲御養子

竹內宮御相續被仰出候、仍此段可申達之旨、御氣色之所候也。

七月二日

江州

長命寺

寺院由緒

山本筑前守　花押

千種中務卿　花押

少辨（花押）：（柳原紀光卿）